

増

上

縁

親が子を養育し意志を嗣ぎ親しく業につとめしむる強き助縁なり。如来の恩寵神聖正義が衆生の欲生の本能の仏性を靈育すれば動物性肉我慾性が解脱し靈性即ち聖子の意志が萌発し小児が漸次に増長して本能より人間としての知覚乃至理性が開発して人としての働をなし得らるゝ如くに靈の子の性が仏子として道德秩序を自覚する正知見が開示して八正道乃至六度万行を為すことになるは親の増長力に長養せらるゝによる例えば植物の種子が土水熱の増上縁に依って長養せらるゝが如し。

弥陀の本願

大原談義に云く、「弥陀は十方諸仏の慈悲の体」と示され、実に弥陀は諸仏慈悲の体たると共に、一切衆生の大慈父に在ませり。大慈悲を体とする弥陀は一切衆生が本覺の御許を離れ遠く迷妄の佗郷に彷徨い、生死極りなく輪廻休むことなきを慙れみ、迹を法蔵の因地に垂れ、独り超世の願を建てて六道貧窮の衆生の為に大施主と為りて永遠無窮の大安に済さんと誓い給いぬ。この一々の誓願は悉く衆生を攝取して自己と同じく仏道を成ぜしめ永恒常住の涅槃に入らしめんとする願望である。

故に知る本願とは便ち大慈の父が一切の子等をして自己と同じく無上の仏位に成らしたいとの願望である。例えば世間の父たるもの我子に対する目的は那辺に存すと云はば、其子を成長させて第二の我とし吾がすべてを譲り其位置を紹がせたき処にある

如く、苦海に沈淪する衆生を愍れみ、いかに加して伏藏せる仏性を開き、仏子の眞面目を顕わし父の全き如くに全からしめ、光明永に輝く涅槃の靈界に歸復させたいのが、弥陀慈父が一切の子等に対する願望である。云い換れば弥陀の本願とは衆生をして仏子仏心全き人格たる仏に成らしめんとの望である。

本願力の増上

大悲の父が一切の子らをして、父の全き如くに円満なる仏に為さんとの願望が便ち弥陀の本願とすれば、例えば世間の父たるもの其子の体育知育を為すに之を養育するの資力なくてはならぬ如くに、慈父なる弥陀は甚麼の能力を以て子なる衆生を摂取して全き人と為さしめ給う哉。曰く弥陀が衆生を摂取して心靈を開発し靈化し給う靈力即ち本願力、または光明または不可思議功德と云う。名は異にして体は同じく、即

ち 弥陀の大靈力である。

已に感情に於て總てに超えて、弥陀を愛樂する、愛の極は弥陀と共に永遠に生命を共にせんと欲する望が起らざるをえぬ。されど凡夫と仏との中間に非常な障礙物が有て双方の間を隔離させている。そは実に外に存在する物でない。凡夫自己の胸中に伏して居る諸々の邪業繋が妨害を為すのである。一心に念仏する時に弥陀の大威神が増上縁と為りて、諸邪業繋も自づと薄らげる。凡夫の精神に、弥陀の大光明との間を妨ぐる邪魔物はいかに深く有ろうとも、弥陀の威神力の前には、妨害はできぬ。闇黒はいかに深重なるも光明の前には敵することができぬ如くである。光明の生活に入りたいと云う深き欲望を以て一心に念仏する時には、弥陀大光明に助けられて邪業繋の闇は消滅す。而すると光明中の生活に入るのである。光明の中には弥陀と共に永しえに離ることがない。弥陀と共なるが故に常に我を助け、總ての煩惱悪業の障は、弥陀大願の増上縁に由て消滅し、不斷に往進し、長時に向上し、念々に仏道を

増進ぞうしんして益々ますます完全かんぜんなる人格じんかくに進むすすのは、是これ弥陀増上縁だつじようえんの力ちからである。

三の増上縁

人ひとは闇くらきもの無知無力業障むちむりよくごつしやうじんじゆう深重しんじゆうなるもの罪惡ざいあく重おもきもの苦惱くのおお多おほきもの意志いし弱よわきもの、此この弱よわき衆生しゆじやうに対して偉大いだいなる強つよき力ちからを与あたえ、資縁しえんして強つよきものとなし給たまう所ところの如來心光にょらいしんこうに三の増上縁ぞうじようえんあり。

一、破闇はあん為明増上縁いみやうぞうじようえん

二、拔苦ばつく与樂増上縁よらくぞうじようえん

三、滅罪めつざい生善増上縁しやうぜんぞうじようえん

破闇為明増上縁

初め破闇増上縁とは、如来の心光は衆生の無明と不正見を照破する増上の力ある義なり。衆生心は闇黒なれば自から自己の闇きを認めず、先づ第一に認識すべきは自己は如来の真理に対して無知なることなり。自己の無知を自覺せざれば如来の心光を獲得せんと欲する動機望発らず。心光を被らんとする希求なきときは之の光を被むるに由なし。自己は無知なり無明なりと自覺するは甚だ難きことなり。ソクラテス曰く、我は平凡の人と更に異なる処なし、若し我に常の人と異なる処ありとすれば唯自己の無知を識るのみと。賢なる哉斯言や。孔子が知らざるを知らずとせよ、是知れるなりと。世のなべての人は自己の無知を自覺せざるが故に眞摯に真理の光明を求めざるなり。自己の無知を確かに認めて眞実に如来の光明を求むる者にして眞の光明により

りて自己の心性を識り得るなり。

人が如来の一大光明中に在りながら、之を識らず、竊々冥々裡に生活するは何ぞや。蓋し人の精神に無明という真理を覆う魔霧の横わるあればなり。仏陀の教うる処によれば人は無明という闇夜に生れ闇の中に生息せるものなり。されば人みな己知ありと謂えり。しかるに自から生の從來する所、死の趣向する処を知らずと。

自己の心闇きを自覺せんと欲せば自から省みよ。人生の真理は那邊にあるか。宇宙の真内容は何ぞ。宇宙の秘密とは何ぞや。如来の存在は何処に求むべきや。如実に自心を知るとは何ぞや。真善美の靈界を知り得るや。眞の如来を知見せしや。自性天真仏を認めしや。如来の無量光を見しや。大日の心光を覺りしや。無尽の莊嚴藏を觀ぜしや。乃至、如来の光明中に包含する処の法は無量なり。何ぞ能く之を挙ぐべけん。斯る如来心光内の真理は之を外に求むべきものにあらず。汝が如来の光明に由って開示せられたる心に於て悉く之を知見することを得べきものぞ。然るに汝未

だ一たびも之を認めず、而して自ら知ありと謂えり。汝が知は唯如来に發現せられたる外面の自然界の一面に於て少く見聞の識知のみ。妄塵分別の影像のみ。仏陀即ち大聖智者が知見し給う真理にあらざるなり。若し汝仏陀の教によりて一心に如来を信念し信念真実に徹透し如来の太心光に接する時汝が心眼開發すべし。心眼開發し心靈覺醒し来る時心靈の曙光なり。斯の一大靈光の外汝を覺するもの有ることなし。

光によりて心靈覺めたる時に宇宙の秘密蔵は開けん。真善美の靈界は顯われん。一切の真理は自ら悟られん。譬えば金鳥東に昇つて地上万物姿を現わし万象面目を示せる如く、心覺醒して如来太光の中に一切の真理は悟らるべし。ここに到つて如上の真理は悉く曉めん。問うて曰く、譬えば晨に太陽東天に昇る時太陽昇るが故に空間の闇黒を破るや、將た夜分の闇黒排除するが故に太陽現するやと云はば、必ず云わん、太陽昇るが故に闇黒失うと。如来の光明は本来遍照せりと云わば衆生何故に之を知見せざる。答えて、如来の光明は元より十方に遍照するも衆生の心眼盲いたるが故

みずかこれちけん
に自ら之を知見せざるなり。日光の下に於て盲者は之を見ざるが如し。衆生心眼開く
とき忽ちに真理の靈界は顕われん。自性天真は見らるべし。

光明は千年の闇室を明るくするの喩と同じく、吾人が無始より已来無明に明失い
たるものも念仏三昧の眼は斯光の増上縁によりて開かれん。叩けよ恩寵の戸を、やが
て開かれん。

之を人の知見に対する破闇増上縁と名く。
聖典に、彼の智慧の眼を開きてこの昏盲の闇を滅すと。

仏智見啓示

宗教意識が正しく客体の本質性能を悟達証明することを得るを啓示とす。即ち客体との關係に正知見開發して客体の本質を示されて其真理を悟入するの義なるが故に、正知見の眼なくば菩提の正道焉。ぞ夫れ進行するを得ん。この正知見の啓示は是宗教生活の眼目にして是によりて初めて神の中の生命に進むを得べし。

如來は一大事因縁を以ての故に世に出現したまう。即ち衆生の仏知見を開示して仏の正道に悟入せしめんが為なりとは大乘圓滿の教なり。一大事因縁とは、本来主体と客体との關係の一大原理は如何と云うに、絶対精神態弥陀の唯一本体は一方には一切知能に發展し産出せられたる世界の個々衆生の心性に本自正因仏性として神的性能具備す。また一方にはこの本体には個々の一切の心機を高等に開發し解脱同化せしむべ

き勢能を以て衆生と關係を結合せんとする理性あり。之を縁と云う。因とは正因
 性として一切衆生は悉く理性ありて客体と關係すべき性能あり。喩えば木に火の性能
 ある如し。縁とは客体には一切を解脫靈化すべき性能あるは火の木を焼くが如し。こ
 の相関によつて衆生の知見を開示して菩提の聖道に進入する故に、一大事因縁の故に
 世に出現したまうと。

正因 仏性。是宗教意識の設定神の衝動なり。仏性即ち神の衝動は自ら客体の内
 容を憧憬しつつ客体との感應を得んとする衝動にして常に進んで高度の意識に進勝す
 るものなり。この神の衝動を仏性の性能として客体との關係をなす。この感應する処
 の機能は一にして能感の心と能応の本質とは一機能の主客両方面にして譬えば木を
 離れたる火に非ず、火を離れて木の焼くることなきが如し。故に主体即ち自己の心機
 を離れて外に恩寵の感應を求め、恩寵を離れて自己のみにしては決して仏知見開示し
 悟入する理あることなし。

自己の精神外に啓示を求むべからず。精神と云うも肉団心、縁慮心を云うに非ず。即ち絶対真心と一致する精神を云う。

縁因即ち啓示の材料。啓示は自己の心機に發現して初めて自己の啓示とす。歴史に現れる経史に現れたる啓示は外部の啓示にして未だ自己に關せざるなり。佗の木の花の如く、自己に發現するに非ざるよりは自己に功能のあるなし。例えば人あつて三昧の中に浄土の依正二報を感じし常に如来の光摂を被るとの話、或は人の大悟徹底の説話をいかほど微に聞き得るも、それは唯外部の事にして自らに關せざるなり。正しく自己の心機に顯現して初めて啓示と云うべし。其要素即ち材料は、禪門の如くは四十八則一千七百の公案の如く、一の公案に專一丹心工夫し、一心凝神して一旦豁然として悟入するあり。或は教觀あり。一念三千の理を觀するあり。或は法界觀に一眞法界を觀するあり。また心仏衆生是三無差別との三平等觀に靜慮するあり。何れも要する処自己の心機にその關係によりて開展して其眞理を知見し悟達するにあり。

心機開展を要するなれば如何なる材料に縁るも可なりと謂う類も有るべけれども、若し心機鍛練術として見る時は或は然らんも、宗教としては神的動機によりて宗教活動を要せんには、唯一の如来恩寵に縁るの外に正知見与え得らるる道なきを示さん。方便の門多しと雖も歸する処唯一のみ。

禪家の如きは洒々磊落、若し知見を得れば則ち愛惡自然に淡泊にして悲智自然に増明すと。是の如きも不可なるには非ざるも、客体に対する畏敬の念を欠き、すべての感情的信仰の要素欠けて、冷索落寞に流れ乾燥無味になり、神的活動新鮮なる活氣を失い無限に對して抑損す。神的憧憬を以て客体に帰命信賴し甚深なる悲壯の感動を生ずる如きの感情信仰の動機と成るべき要素欠乏して、冷淡索落たる支那人の如き風流雅致の宗教意識を作るには可なり。然れども神聖正義恩寵により至真至善至美また神韻壯快なる意識を作るには不適當なり。

善導大師は觀經及び般舟經等に依りて客体の真金色円光徹照し端正無比なるを思

想觀察そうかんさつすることを教え給おしたまえり。廬山ろざんの遠公おんこうも阿弥陀仏あみだぶつを專想凝神せんそうぎようしんせし如ごとき、宗教しゆうきやうとしては初はじめに感覺かんかくてき的に神かみを表明ひようめいするは最もつとも純粹じゆんすいなる宗教しゆうきやう意識いしきを作るに適てきす。
絶對ぜつたいなる觀念かんねんには、阿弥あみの本質ほんしつは絶對精神ぜつたいせいしん態なるも、關係かんけいについての觀念かんねんには、成なる可程べきほどは円満えんまんなる客體きやくたいの性能せいねうを表明ひようめいすべき表示ひようじを要ようす。感覺かんかくとしては阿弥陀仏真金色あみだぶつしんこんじきにして円光徹照えんこうてつしやうし端正無比たんじやうむひなるを想おもう。
また阿弥陀仏あみだぶつは神聖態しんせいたいにして正義せいぎと慈悲じひと全智慧全能ぜんちえぜんのうなる威神無極いじんむごくの神尊しんそんなりと觀かんずべし。

啓示の真否

楞嚴起信等りやうごんきしんとうに行者加行ぎやうじやけぎやうの中うちに在あつて魔まの爲ために障礙しょうがいせらるることを明あかす。楞嚴りやうごんには色しき受想行識じゆそうぎようしきの五陰おんに各々種々おのおのしゆじゆの妄象顯現もうざうけんげんして人ひとの精神せいしんを惑亂わくらんすと云いうことを説とけり。又また

起信論に或は衆生ありて善根力なく則ち諸の魔外道鬼神の為に惑乱せらる。若しは坐中に形を現して恐怖或は端正の男女等の相を現ず。当に唯心を念ずべし。境界則ち滅して終に悩されずと。或は天像菩薩像を現じ、或は如来像相好具足し、若くは陀羅尼を説き或は宿命過去の劫を知らしむ。或は世間名利の事を念著せしめ、又人をして数々瞋り数々喜で性常準なく、或は多く悲憂多睡多宿多病にして其心を懈怠ならしむ等。この専ら神的觀念の中に於て、或は身体と精神との健全に訓練せられざるが為にして精神には専ら凝神静慮するに或は曾て印象したる種々の象相が再現するに外ならざるなり。然るに正しく一の要素ありて夫に對する觀念ならば本より正當と云べし。然るに期せざる処の物象が発現するは不可なり。是全く修練の未熟なるとまた脳の性質の自然なるによる。

魔というも外に在て爾るに非ず。全く自己精神の用意の完全ならざるによる。若しよく淬砺精修熟達する時は念に随い意思に随て自在なるを得べし。

魔まと云いうも自己じこの精神せいしんの未いまだ調適ちようてきし熟達じゆくたつせざるが為ためにして、斯かくの如ごときの業相魔障ごつそうましやうと名なづくべき精神せいしんの妄想的もうそうてきさう作用ようを碎破さいはするに非あらざれば、純粹じゆんすいなる精神態せいしんたいとして、予期よきする処ところの客体きやくたいの本質ほんしつと感応かんのうし一致いちすること能あたわざるべし。

注意ちゆういすべきことは、たとい予期よきするところの本質ほんしつを真実しんじつに発見はつけんすることを得うるも其その獲得ぎやくとくに悦よろこびて内心慢ないしんまんずる如ごときは是魔こゝろまといわざるべからず。たとい何なんにしても全まったく自己じこの神的觀念しんできかんねんの啓示けいじたる価値かちありて宗教生活しゆうきやうせいかつの眼目がんもくと成なるときは是魔こゝろまとか或あるいは妄想もうそうというべからず。

或あるいは精神せいしんの錯覺さつかくし易やすきと或あるいは病的びやうてきなる妄覺もうかくなるあり幻覺げんかくより起おこる等とうはすべて之これを従じゆう来魔らいまと伝つたえ来きたりしなり。

大乘仏教と啓示

小乗教しょうじょうきょうの朴質ぼくしつなる意識いしきより進み来りし大乘仏教だいじょうぶつぎょうは最も理想高遠もつとりそうこうえんにして幽玄深邃ゆうげんしんすいなる豊饒ほうじょうなる宗教しゅうきょう意識いしきなれば、現実世界げんじつせかいを超越ちょうえつしたる精神界せいしんかいの内容ないよう即ち觀念世界くわんねんせかいの方面ほうめんのみを示せり。故に其所説そのしよせつの要素ようそは概して三昧定中さんまいじょうちゅうの内面ないめんを説明せつめいしたるものにして、其内容そのないようを窺うかがわんとするには三昧まいに入いつ観念世界くわんねんせかいに通入つうにゅうするに非ざれば其本質立そのほんしつりつ義ぎに悟達ごたつすること能わざるは大乘仏教だいじょうぶつぎょうの特質とくしつなり。

華嚴けごんは華嚴三昧海中けごんさんまいかいちゅうの内容ないようにして法華ほつけは法華三昧ほつけさんまいの客体きやくたいの表明ひやうめいにして何れも其内容そのないようは三昧定慧さんまいじょうえに入るに非ざれば窺うかがうことを許さず。故に蓮華藏世界れんげぞうせかいに遊入ゆうにゅうして理事りじの無碍むげ法界ほうかいまたルシャナの宮殿きゆうでんに昇のぼらんと欲せば華嚴三昧けごんさんまいの宝鑰ほうやくを要す。

靈山会上りやうぜんえじょうに親しく法身具相ほつしんぐそう三十二、万徳円満まんとくえんまんに大衆だいしゅうの為に圍繞いにようせられたる常在説法じやうざいせつぽうの啓示けいじを獲えんとせば法華三昧ほつけさんまいによらざれば大事だいじの門開くこと能わす。故にすべての大乘だいじ仏教ぶつに教うる処ところの常住じやうじゆう現在の仏陀ぶつたに接せつせんには、仏知見ぶつちけんを開示かいじせざれば其本質そのほんしつ意義いぎに達入たつにうするなし。故に大乘だいじ仏教ぶつの眞実内容しんじつないようを識しらんと欲せば須らく精神せいしんの内容ないよう

に入るべき三昧さいまいによらざるべからず。

昔むかし惠遠法師廬山ろうざんに在あつて白蓮社びやくれんじやを結び専ら精識せいしきを西方さいほうの聖容せいように凝こらし至精しせい至微しび幽ゆうを極きわめ精せいを尽つくすこと多年たねん、三摩耶さまやの中に於おいて弥陀みだの聖貌みすがたを觀かんじ浄土瑠璃宝地じようどるりほうじ及び瑤池水流光やうちすいりゆうこう明妙法みようみうほうを演暢えんじようするを觀かんじ、其他そなたの會えに関与かんよするもの高僧逸士こうそういつし、遠公おんこうの高志皎潔こうしこうけつたる志し操そうを慕したうて同じく浄業じようごうを精練せいれんし一心純熟しんじゆんじゆくして或あるは聖顏せいげんを感じ浄境じようきやうを觀見かんけんするもの甚はなはだ多おほし。又南岳慧思またなんがくえし禅师ぜんじ師定じようぢゆう中ちゆうにあつて弥陀みだ及び弥勒みろくの摩頂まぢようを被こうむりしが如ごとき、又隋またずいの智者大師ちしやだいし法華三昧ほつげさんまいを行ぎようじて經きようを誦じゆし藥王品やくおうほんの是真精進ぜしんじようじん是名眞法供養しんぼうみようしんぼう如来にやうらいと云いうに至いたつて即すなわち豁然かつねんとして大悟たいごして靈山りようざんの一会儼然えげんぜんとして未いまだ散さんぜざるを見るみ。

啓示けいじに種々しゆじゆあり。天然教てんねんきやうが神かみの啓示けいじとして信しんずる處ところは本もとより幼稚ようちにして其感覺そのかんかくてき的にあるあるいはトホカミの神かみヨセに人ひとに神かみは托たくして予言よげんを示しめす。或あるは物教ぶつきやうなどと言いう。または儒教きやうの筮竹ぜいちく、神かみに卜筮ぼくぜいに啓示けいじせらるる易えきの理りの如ごときは是儒これじゆが啓示けいじなり。何いづれにしても天然てんねん的幼稚てきようちなることは論ろんを俟またず。

儒に、国家將^レ興必有^ニ禎祥^一。国家將^レ亡必有^ニ妖孽^一。見^ニ乎^一著龜^一。動^ニ乎^一四体^一。禍福將^レ至善必先知^レ之。不善必先知^レ之。故至誠如^レ神。と。

進化^{しんか}発達^{はつたつ}せる精神^{せいしん}宗教^{しゅうきよう}にては客体^{きやくたい}との関係^{かんけい}に知見^{ちけん}を啓示^{けいじ}せらるるも観念^{かんねん}的に啓示^{けいじ}せらるるが故^{ゆえ}に、先づ客体^{きやくたい}の要素^{ようそ}は聖典^{せいてん}に示さるる如く^{ごと}、例^{れい}せば、無量寿^{むりやうじゆぶつ}仏^{ぶつ}眞金色^{しんこんじき}にして相好^{さうごう}光明^{くわうみょう}の相^{さう}を聞き、或^{ある}は形像^{ぎやうざう}に表明^{ひやうめい}せるものを写象^{しゃしやう}し之^{これ}を反映^{はんえい}して客体^{きやくたい}化^{いか}して啓示^{けいじ}する如く^{ごと}、客体^{きやくたい}の本体^{ほんたい}は本^{もと}より精神^{せいしん}の对象^{たいしやう}にして之^{これ}を法界^{ほうかい}身^{しん}と名^なづく。感^{かん}覚^{かく}的^{てき}の妙色^{みやうしき}莊嚴^{しやうごん}というも經驗^{けいけん}の感^{かん}覚^{かく}にあらず。天然^{てんねん}教^{きやう}の如く五^ご官^{くわん}に對^{たい}する感^{かん}覚^{かく}に默^{もく}示^しせらるるとは異^{こと}れり。

見仏の心状

念^{ねん}仏^{ぶつ}三昧^{さんまい}の所^{しよ}期^ては見^{けん}仏^{ぶつ}にあり。されば二^そ祖^{しやうにん}上人^{べつじ}は別^{ねん}時^{ぶつ}念^{ねん}仏^{ぶつ}を行^{ぎやう}ずるに見^{けん}仏^{ぶつ}を期^てせざ

れば功を成じ難しとの意を以て示されし。此に就て見仏の心理的狀態を如何に心得て予期せん。見仏と云わば幼稚なる者の觀念には、見仏は若し三昧發得せば肉眼に對して玲瓏たる皎月雲間より現れるを目撃する如く心眼にても自己の心眼に對して客体に全く向うに現われたるを自己の心眼に反映すること肉眼の如くなる哉と。此に就て暫く自分の經驗に基き説明せば、世界の相對的なると靈界の絕對的なるとの區別を知らざるべからず。肉眼の感覺は相對的にして自己の肉眼と所對の物色との關係によりて視ることを得。例えば人の眼あり、太陽ありて視ゆ。如來は自然界の太陽の如くに相對的關係にあらず。絕對の心靈界に對すれば、吾人の心靈は全体の分現なる自己の心靈なれば、如來大心海中の自己の靈波なれば、自己の根柢なる大心海より自己の心靈に現ずるなり。

故に自己の絕對根柢より自己に現じ、其が反映して相對界の肉眼に對する太陽の如くに、目前に現ずるを見る。絕對には實には彼此の別なく、大小の分なし。其絕對大

心靈界の方面なる如来心海より現じたる靈象は、現じたるが反映して彼に見ゆ。自己の心靈より起つて、全く遙に旭陽赫々として光を放つ如くに、彼しこに現ず。相好円満にして、光明徹照す。彼此の相なき絶対の大靈よりまた彼此の相に現ず。

相對の日光と自己の眼との因縁關係によつて現ずるとは反對なり。日光は彼より自己の眼に反映して視る。仏の相好莊嚴は絶対より自己の内的靈性に発現せるを彼の空界に投映し、之を觀ず。其靈象 光明の赫燿と徹照せる象、また肉眼対象の物色の及ぶ所に非ず。

絶対如来心より衆生心中に現じたる如来相好及び妙色莊嚴なるが故に觀經に、如来是法界身、入一切衆生心想中一と。光明大師の讚に、弥陀身心徧法界一。映二現衆生心想中一。

啓示の真理

宗教的関係の能所一致の如來の啓示の恩寵が人の証明とすれば啓示の相に實現せる相の其人によりて相異なるは何に由るぞと疑う者あり。

答えて曰く、如來の本質は本同一の即ち一大觀念、即ち大円鏡として法界に周徧せる所の智慧態にして形相の得べきなし。衆生の心相に随つて種々の異相を現す。即ち衆生心想の各々異なる故に其心に應じて所現の表象また同じからず。例えば大なる玻璃鏡面に映現せる面相向う所の人々に依つて影像異なると同じく、鏡体も同一にして人々の見る所の影像同じからざるが如く、如來の本質は平等の觀念態なれども衆生自己の所念を反映して自己相應の相を感じす。如來の本質一切所に徧するが故に衆生一切所に於て隨念の顯現限りなし。

観經に曰く、如来は法界身。入一切衆生心想中。是故心想レ仏時。是

心即是三十二相八十随形好。是心作レ仏。是心是仏。諸仏正徧智海從ニ心想一生成

衆生若し如来相好身を以て如来を念ずる時は如来は相好莊嚴の相を以て之に応じ、

また如来の内包の徳を念じて心念を凝さば如来は智慧、神聖、恩寵等の相を以て啓示

す。或は法身を觀ずる時は如来は無相法身本質のみを以て衆生に觀ゆることを得。

起信に曰く、如来は本智慧体にして清淨無相。無相の故に一切相として現ぜざるは

なしと。

また曰く、如来本法身智相第一義にして用相の得べきなし但し衆生の見聞に隨て

の故に用相を現ず。

此にまた注意すべきことは如来の本質は心靈態なることを以てこれに相應せる自己

の根柢なる心靈に於て機感相應して啓示せらるべし。心眼にあらずして肉眼を以て物

質の中に如来の相を發見する理あることなし。

啓示の三

如來の本質は法界に周徧する觀念態にして衆生の心念に應じて機感相應して種々の相を見んと。しからばいかなる表相を以て顯現するかとならば、所現の境相無數なりと雖、如來に三身を以て衆生に対するが故に、之れに應じて三種の形式を以て義意を尽さん。

一、応身 感覺的啓示

人の精神の内容は、其所觀に對する知覺たると追想たるとまたは想像たるとに拘わらず、先驅として精神に感發し来るは直觀的感覺的なり。而して人の心念に應じて或は明相現することあり、大さ或は錢の如く或はまた鏡の如く、光輝映徹す。或は稀有なる花を見または瑠璃宝池を見る。觀念法門に如來真金色にして円光徹照し端

正無比なるを觀ぜよと。

感覺的啓示を二に分つ。一、依報。二、正報。依報とは淨土の莊嚴宝地宝池宝樓閣華座等を觀ず。正報とは仏菩薩の聖相を觀ず。觀經に如來の身相は炎浮檀金色八萬の相好光明普く十方界を照しまた觀音勢至等の聖衆各八萬の相を以て法身を莊嚴し給うを觀ず。或は丈六八尺の身、相好円備して池水の上に立つを見、または如來虚空徧滿の身を現ずる等。

自ら觀じまた他に教えて觀ぜしむるに第一に感發するは感覺態なり。或は花を先に感見するあり、または明相を先づ感ずるものありと所感の表相は或は異りと雖も精神清明にして身心融液なる如きは異なることなし。

觀無量壽經また觀仏三昧經等に感覺的啓示の表相を広く明し給う。

天台大師法華三昧定中に靈山一会未散を感見し善導大師般舟道場に宝地華座等を感見せしは感覺的心像なり。

感覺的心像は如来の本質に属する成所作智の作用にして衆生の心念に應じて顕現する大用にして之を觀ぜば尚進んで如来の本質内容たる心象を觀ずるに報身内包の徳とす。

二、報身 抽象的啓示

如来応身の表象たる光彩燦爛たる相好光明等を觀見してよりは報身如来の普遍的写象の万徳を觀ず。即ち觀經に、仏身を觀るものは亦仏心を見る。仏心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生を摂すと。

無量寿經に、仏智、不思議智、不可称智、大乘広智、無等無倫最上勢智、等を明了に信ずと。

報身内包の徳を四徳を以て明さん。

智慧、慈悲、神聖、正義、

此四徳は本然として法界に周徧せる神的光明なり。すべての宗教的意識を照して

心しん靈れいを開かい発はつする性せい能のうなり。智ち慧えに大だい円えん鏡きやうち智ち、平びやう等とう性しやうち智ち、妙みやう觀くわん察さつ智ち、成じやう所しよ作さく智ちあり。

鏡きやうち智ちは一大だい觀くわん念ねん態たいにして、一さい切しき色しき心しん二に像ざうは鏡きやうち面めんの映えい像ざうなり。性しやうち智ちは内ない性しやうち平びやう等とうにして一

切さい色しき心しんの本ほん性せいと秩ちつ序じよと統とう一ふと普へん徧てき的きやうき法ほう軌きを持もつ。察さつ智ちは一さい切しき万まん法ぽうに一さいと一さい切しきと相さう即そく相

入にゅう重じゆう々く無む尽じんの交かう渉しやうを以もつて衆しゆ生じやうの智ち見けんを開かい発はつす。作さく智ちは一さい切しき感かん覺かくの根こん元げんにして五じん塵ちんと

五しき識このさは此この作さく智ちによる。衆しゆ生じやう心しん靈れい開かい発はつすれば一さい切しき処しよとして淨じやう土どならざるなし。

次つぎに衆しゆ生じやう倫りん理りの光こう明みやうと名なづくべき神しん聖せい正せい義ぎ慈じ悲ひを觀かんず。神しん聖せいとは真しん理りの光こう明みやうを以もつ

て儼げん臨りんして道どう德とく自じ律りつの規き定ていとなり、正せい義ぎは如にやう実じつの知ち見けんを以もつて我われを犠ぎ牲せいにし如にやう來らいの聖せい意い

実じつ現げんとして行かう動どうす。恩おん寵ちゆうは衆しゆ生じやうの知ち見けんを開かい発はつし解げ脱だつ靈れい化かうの靈れい能のうとして実じつ現げんす。斯この三さん能のう

は如にやう來らいの中なかに如にやう實じつの行かう為いせしめんが為ための啓けい示じなりとす。この四し智ち三さん能のう如にやう來らいの德とく相さうなり

と觀かんじ、之これを反はん映えいして客きやく体たい化かうして啓けい示じす。斯かくの如ごとき啓けい示じに如にやう來らいは表ひやう号ごう的てき擬ぎ人じん觀くわんとなり

如にやう來らいは智ち慧え慈じ悲ひ神しん聖せい正せい義ぎの万まん德とく円えん滿まんの表ひやう明めいを以もつて宗しゆう教かう意い識しきに對たいして觀かんぜらる。

如にやう來らい万まん德とく豐ふう備びし給たまうて衆しゆ生じやうの心しん靈れいに知ち見けんを与あたうるは報ほう身しんの德とくとす。

直観は具象的にして写象は抽象的にして説話的なり。一は感覺態にして他は超感覺なり。宗教意識には宇宙全体如來にして、神聖正義慈悲等の衆生に儼臨することは常に宗教的意識を充実す。

三、法身 理想的啓示

報身觀として宇宙を如來の内容として觀念し、次に如來の本質なる法身を觀ず。如來の法身は清淨本然にして法界の体性にして自性天真は絶對無限、永恒自存、心靈態、無始無終本有の態、超絶無寄、總括總合的觀念態なり、空想感覺を超越し、また写象にあらず超感覺理想体なり。

聖道の淨土と淨土の淨土

聖道と云い淨土と云い同じく大乘眞実の教なれば暫らく能入の門は異りと雖も所入

の境は全く同じ。故に浄土実義の背面には必ず聖道の教義あり。

聖道門は其心淨きが故に仏土淨と、心が已に清淨化したる聖人が清淨仏土と見ゆる處は、凡夫濁惡の業識には穢惡不淨の国土を見る。本来自己の心を以て依報なる世界万物の見ゆる物なれば先づ自己の心を淨うして而して見よと云わば濁惡の凡夫には不可能なり。

浄土門の念仏して浄土に生ずるのと、聖道門に心淨きが故に仏土淨しとが、能く其位置に到達すれば全く一致す。

然るに凡夫に対して汝が心を淨めよ、然る時は世界も自ら清淨なるを感じんと云わば夫は凡夫の及ばざる處として断念する。然るに汝自己の無知無力なるを自認して一心専ら弥陀を念ぜよと、全く自己を捨て全く弥陀心光と合致する時は、肉眼所感の娑婆に執著せずして弥陀の光明中に憧憬する。然すると恍惚の中に光明界中の人となる。然る時は凡夫濁亂の心も自から弥陀摩尼宝珠に淨められて心が淨らかな

るとき
時ここを去らずして浄土を感じらるる。

とき
彌陀の清浄光は凡夫の濁悪不浄を浄めて心を浄化する光明なり、心が浄化する
とき
時は其心眼を以て見れば自から清浄国土に感じらるる。然もそれは実感なり。決して
りくつ
理窟に非ず。

しからよ
然ば世の多くの念仏者はなぜに清浄を実感せぬであらうとなれば、それは口にこそ
ねんぶつ
念仏すれ共心靈が生れたままの自己計りを執して全く彌陀に投合せぬ故なり。矢張り
じぶんえら
自分偉がりで自我を捨て兼ねる故なり。吾人は現在の自我の実に無知無力なるを真実に
しんにん
信認して、逆も自己の力の及ばざる処と思ひ込んで、少しも自己を惜まず、少しも未
れん
練を残さず、全幅を如来の中に投げ込んで仕舞いぬ。然すると如来は染汚の我を浄め
て如来の子として浄めて給わりぬ。夫からは従前の我と今日の我とは人生観と宇宙観
とが全然転じ、今日でも肉我を本位と為して見れば寒暑風雨左までに珍しとも感じら
れねども、意を転じて如来の光明中の我となりて観れば実に松吹風の音も七重宝樹

の法音を調べ、入り日の麗しきも浄土莊嚴に映飾し、肉眼と法眼は人の子と如来の子と不一不異の關係にて生活する。生死流轉の我と常住不變の我と同居して妨げず。

闍通上人の教化にて三昧發得したる名古屋夷屋の婢は言えり、三昧を得れば此土も浄土であると実に然り。弥陀と一処になれば浄土に居る。何となれば浄土と云うは弥陀の在す処故に我弥陀と共に在る心は即ち浄土に安住するなり。

さればとて邪見流の輩が娑婆即寂光、東台の桜花北郊の紅葉即是浄土なりと云う即の実義を謬てる見解とは大に異なる。娑婆即寂光は凡夫の肉眼で見ゆるのが娑婆にて、仏陀が仏眼にて観ずる方は寂光土なり。凡夫は唯娑婆の方のみを見て浄土の一面は見えず。仏陀のみ五眼具に備わりて娑婆と寂光と雙照知見し給う。

然るに我等は未だ仏眼開けざるも自己肉眼によらず専ら弥陀の中に己を投げ込んで弥陀に同化せらるれば法眼開く時が得らる。法眼開く時は分に浄土は実感せらる。

たとえ実観するに至らざるも自己は弥陀の子なりと深く信じて弥陀に依って復活さ

せて頂^{いた}く時^{とき}は心^{こころ}は浄土^{じょうど}に安住^{あんじゅう}するを得^う。若^もしここ^{こゝ}に到^{いた}れば聖道^{しょうどう}に心^{こころ}浄^{きよ}ければ佛土^{ぶつど}浄^{きよ}し
と云^いうと同一^{どうい}義^ぎに帰^きす。

せいなるみなをたたえては、
みむねのあらわれあおぐなり
によらいのまたなきみめぐみを、
われらがこゝろにみたしめよ
によらいのしんせいなるみむね、
われらがこゝろをてらしませ
によらいのせいぎなるみむね、
われらがこゝろにあらわれよ

拔苦与樂増上縁

人に憂悲苦惱ありて、苦惱は人生に必須の要素なり。苦を感じ、苦の理を知らざるは凡愚なり。人の苦惱は人の内心を円満に發達せしむるに必須の要素にして、苦は人の生滅無常の肉我に固執する迷妄の病を悟らしめ、仇なる榮華に迷える心を覺ましむ。苦惱は肉我の粗澁を厭うべきと、靈我の妙樂を欣求せしむるとの手段なり。肉我の憂悲苦惱を諦め味いたる人にして始めて如来の慈悲なる増上縁を憧憬する念を生ず。

然かれども人生の苦惱は肉我の粗澁を悟らしむる手段にして、之に由つて如来の増上縁を憧憬すべき目的あることを識らざるものは實に是不幸なる生活なり。拔苦与樂の増上縁たる光明は法界に周徧して、之に攝取せらるる者は肉我の苦澁より拔濟せ

られて靈^{れい}我^がの内心^{ないしん}靈福^{れいふく}なる精神^{せいしん}生活^{せいかつ}を為^なし得^えらるべし。

肉^{にく}我^がの苦^{くるしみ}は人生^{じんせい}の幸福^{こうふく}主義^{しゆぎ}を阻害^{そがい}す。シヨウペンハウエル^{シヨウペンハウエル}の語^ごを藉^かりて云^いわば人^{ひと}の意志^{いし}は其^それ自身^{じしん}無知^{むち}にして目的^{もくてき}なき努力^{どりよく}なり。故^{ゆえ}に盲目^{もうもく}生活^{せいかつ}の故^{ゆえ}に確^{たしか}に満足^{まんぞく}の状態^{じやうたい}ならず。

感情^{かんじよう}の生活^{せいかつ}は苦痛^{くつう}、危険^{きけん}、失望^{しつぼう}、退窟^{たいくつ}が其^{その}内容^{ないよう}を作り^{つく}需要^{じゆよう}を惹起^{じゃつき}す。其^{その}苦痛^{くつう}は人^{ひと}を驅^かりて活動^{かつどう}せしむ。所謂^{いわゆる}肉欲^{にくよく}の奴隸^{どれい}として盲動^{もうどう}す。而^{しか}して其^{その}目的^{もくてき}を達^{たつ}せざる時は苦^く痛^くは猶^{なほ}一層^{いそう}高まりて遂^{つい}に堪^たゆべからざるに至^{いた}る。若^もし其^{その}目的^{もくてき}を達^{たつ}する時は暫^{しば}く満足^{まんぞく}を感じ^{かん}たる如^{ごと}くなるも此^{この}快感^{かいかん}は忽^{たち}ちに消^きえて最高^{さいこう}の満足^{まんぞく}は到底^{とうてい}望^ぞまれざるなり。人生^{じんせい}の旅路^{たびじ}は、之^{これ}を荆棘^{けいきき}兩側^{りやうさわ}より覆^{おお}いかかりて旅人^{たびびと}が一方^{ほう}の刺^{とげ}を避^さくれば他^たの一方^{ほう}の刺^{とげ}にて傷^{きず}つ所^{ところ}の山路^{やまじ}に比較^{ひかく}するを得^うべし。

人生の苦悩

生活上の苦。身体からだの健康と力とを保存増進ほぞんぞうしんするための食物しょくもつに於おいても營養えいようの範圍はんいより墮落だらくし食物しょくもつの快感かいかんのみ貪むさぼりて營養えいよう機関きかんを濫用らんようして唯ただだ快楽かいらくを生しずる機関きかんとす。開か化する人民じんみんが飲酒欲いんしゅよくのために損そなはるれば經濟けいぎの紊亂びんらん、家族かぞくの零落れいらく、精神せいしんの敗壞ばいえ、道德どうとくの衰頹すいたい遂からだに身体からだの絶滅ぜつめつは直接ちよくせつの結果けつかとして貧困ひんこん、犯罪はんざい、疾病しつぺい、狂顛きやうてん、自殺じさつ及び子孫しそんの零落れいらくは終局しゅうきよくの悲劇ひげきなり。旦夕たんせき食卓しょくたくに就つくことに只管ひたすら口腹こうふくの奴隸どれいたるものに何ぞ専もつぱら一じ事に精神せいしんを委ゆぬるをうべき。

輓近ばんきん社会生活しゃかいせいかつの發達はつたつの結果けつかとして人口じんこうの増加ぞうかの爲ために個々こごの家族かぞくの団欒だんらんの和楽わらくを破壊はかいし互たがいに相知あいしらざる無数むすうの民衆みんしゅうが市内しやくやの借家しゃくやに入り込み一家いっかの平安安樂へいあんあんらく適意運動うてきうんどうの自由じゆう所有しよゆうの愉快隣保ゆかいりんほの交情かうじやう団欒だんらんの和楽わらくも其妨そのさまたぐる所ところとなる。下層かそうの民たみに至いたつては雜居ざつきよの爲ため

に生命健康風習家族的感情道德幸福を危殆ならしむ。借家雑居し生活上幾多の妨害に苦しむもの這般の悪習を以て自然的のものと認めんとす。衣服は身体保護の必要と身体を修飾するものなれども、流行なるものは変化常なく圧制的に之を趁うものをして誘いて全力を傾倒せしめ、婦女子の健康と発達と幾多の家族の幸福と平和とはこの流行という圧制者の犠牲に供せらる。若し此の婦女子が時流を趁う為に、愉快と平和と自由とを滅す精神の半を余の献身的努力に変更するを得ば、いかに幸福を文明上に与うるならん。

衛生体力を発達せしむる運動と遊戲に就いては、都会は猶大なる牢獄の如く人皆狹隘なる場所に居りて器械的な労働に従事する製造所、工場、店舗、帳場、市街、家屋何れも倭小にして狹隘人が其の抑圧を感じる如何に甚しきぞ。日曜の来るや外出の時間を利用して工場を去り郊外に趨くの如何に熱心なるぞ。肉体的労働そのものに於て都会にありては困難を感じ自由を欠く。

経済的生活の本質に二件あり。労働と資本なり。人類は財産の根本的形式貨物の貯蓄によりて生活す。貨物は労働によりて得らる。労働は文明の発達と共に職業の形を取る。経済的生活については世の進歩と共に肉の生活が発達し為に経済的生活の競争より来る苦は益々甚し。

更に奢侈と貪慾あり。之れ下劣なる性質の特徴にして人一たび斯の疾に罹らば精神乾溜しあらゆる高尚なる努力止む。貪慾は方に費すべき所に吝にして奢侈は方に惜むべき所に濫費す。人をして怠惰驕慢虚飾奢侈に陥らしむ故に富は危険なり。貧窮は経済上の徳を発達せしむるに極めて不利なり。世の貧窮なる人は所有の觀念なく赤貧にして日々糊口の資乏しき家の児童は所得所有の快樂を経験することなし。

次に精神生活の教育の不正より来る不幸としては、学校は一方に個人の才能性向を養い他方に将来の地位職業を定むる準備をなすに最も適當なる場所なり。人は一般に同等の教育を受けても其性質に適せざる教育と其位置境遇の為に運用すること能わざ

る知識は全く価値なし。己が能力以上の知識は人をして益々愚ならしめ唯知識のみを重んじて其天賦の能力性向に適應せざる結果は不消化的知識を以て判断を攪乱し抑圧するのみ。又唯記憶をのみ教育とし徒に器械的に暗記する定則又事実を提供するは敢て希くせざる也。全く自己の理解性を開展せざる知識は習慣と試験癖の致す所に於て理解性を使用する方法を知らざるによる。

ハックレーが痴愚は生れながらのものにあらずして十中八九までは父母教師が其自然の知的欲望を抑圧し音に無味乾燥なるのみならず主として不消化なる糊口に関する人間的欲望を絶えず生ぜしめんとするに由ると。痴愚と共に生じ来るものあり傲慢なり。過度の教育は独り知性を鈍らすのみならず又感情をも鈍らす。

人の教育と境遇との間に衝突起り職業及び地位が従来受け来りし教育を利用せしめざる時は知識は彼を幸福にせざるなり。彼は身分不相応なる要求を起し己が職業を快とせず、己が外囲に対して心地安からざるものとす。不当の教育ありて農事に従

事じするものの如ごとき之これが適例てきれいなり。徒いたずらに世人せいじんには憚はばかられ軽かろんぜられ為ために己世間おのれせけんに對たいして心平こころたいらかならず、自ら己みづかおのが地位ちいをもて己おのれに適てきせざるものとす。斯かくの如ごとき今日こんにち其幾何そのいくばくあるを知らず。男子だんしと云いわず女子じよしと云いわず教育きよういくある為ために己おのが属ぞくする階級かいきゅうより放逐ほうちくせらるるもの世間せけん至いたる処ところに是有これあり。彼かれらは己おのが自活じかつの要求ようきゅうはその品位ひんいを墮おとすものとして為ために不快ふかいを感じかんず。

教育きよういくの進すすむに受うけたる教育きよういくが個人こじん及び社会的關係しゃかいてきかんけいに適合てきごうせずして人ひとをして不幸ふこうに陷おちいらしむるもの毫ごうも怪あやしむに足たらず。教育きよういくある婦人ふじん十九世紀せいきには家庭かていに於おいて風波ふうはを起おこたりしが近來きんらい大学だいがくなどを出でたる者もの往々おうおう其受うけたる教育きよういくの為ために糊口ここうに苦くるしむ。是高等これこうとうなる知識ちしきをのみ得うることを学まなびて衣食いしょくを得うる方法ほうほうを学まなぶを忽ゆるがせにせし故ゆえなり。彼等かれらは斯この損害そんがいを償つぐなわんとしてその力ちからと欲望よくぼうとを有ゆうするも其教育そのきよういくは之これを實現じつげんするを許ゆるさず。何を以もつて之これを許容きようようせざるか、曰いわく衣食いしょくの為ために手足てあしを勞ろうするは教育きよういくあるものの名譽めいよを失墜しつたいするの虞おそれありと謂おもえばなり。

老 苦。 人老いるに随つて、四肢衰耗し、五体老耄す、身色衰え、氣力衰耗の
ために進退不自由なり。形色の上に感ずる苦悩に加うるに、壯者の為に疎せられ怙恃を
失う。

人は活業の為に苦勞を忘る。然るに老て之に従事すること減ずるに随つて事業に参
与する能わず。無聊の為に苦しみ勞働意の如くならず。加之、己が意を容るる昔の
朋友が欠けゆくに随つて寂寥の感を増す。或老者には之と反對にまた若年のむかし
を迎るなどの感懷なきに非ざるも苦悩多し。

病 苦。 病者の身体上に直接に感ずる所の苦悩も多けれど之と伴うて惹起し来る
ものは、病氣永続して苦痛慘慚に至らざるやと将来を慮り、人は希望によりて生活
するに然るに希望をも目的をも犠牲に供せざるやを慮り、また死後の我生活は滅亡
するものなりや、また多年我有の念をもて執着せし所属物を他有に帰するを憂い、我
死なば親族等の快樂の犠牲となるを憤り、己が第二の生命とまでに執着し来りしす

すべての所有も他有に帰す等の如き、肉我に執着するものには死に次ぐ苦として免るべからざる所なり。

愛別離苦。人には自己と利害苦楽を同じく感ずる愛者との別れ、恋人親子夫婦兄弟

若くは朋友の間に於る別離あり。或は生別または死別あり。別離の苦甚し。

怨憎会苦。此苦は人は肉我の幸福を追求するに主我は自己保存と自我幸福の目的

を阻害するものに対して怨憎の感生ず。君父の復讐の如きは習慣的道德より生ず。

怨憎なるものは肉我の幸福の欲望を障害せらるるに關する感情にしてこれまた其理を

悟らざる一種の迷情なり。世に此の怨憎のために憤怒、嫉妬、猜疑、復讐、害意、等

の感情の為に甚しきは己が身を忘れ敵を悩めんが為には我身の苦をも感ぜざるに

至る。

求不得苦。己が能力境遇を以て佗人のそれに比較し己が能力価値所有を他人に

比較し対照し己れ優れて人が己を顧ざれば心を痛め、他の幸福に嫉妬を生じ、他の

不幸には惡意的歡喜を生じて一家の不和郷党の争鬭侮辱等を生ずるに至る。

生命、家庭の平和、財産、名譽、權利、地位、自由等は肉我の生存に要求す。之等を求めて得ず、若し身体生命侵害せらるゝ苦は、殺人毆打創傷或は他人より不興憤怒、侮慢、輕蔑、營利、束縛等の為に人の生命また健康を害すること甚だ多し、例えば或惡者の如き憤怒の為に逆上し吐血して死せるあり。二、家族の平和の要求に對する害は姦淫誘拐また隱微なる讒誣煽動の為に平和を害せらるる如き。三、財産に掠奪、窃盜、詐偽、私消、及び他の狡猾なる方法によりて奪却せらる。四、名譽に侮辱、惡評、誹謗、等より隱微にして巧なる侵害は枚挙に遑あらず。五、自由に撓帶、強圧、褫奪、脅迫、威赫等、すべて人格の自由を害する。六、精神生活には確信見解、信仰、宗教、風俗、習慣等を侵害するの迫害、凌辱、侮辱、疎略、改宗、強勸、等あり。此等の人生の身体及び精神生活に必要として求むる処のものに對して害せらるることを求不得苦と云う。

五蘊盛苦。

五蘊は色受想行識 即ち肉身と心となり。

人生肉の幸福を貪るより苦

悩の感深し。

一度肉に死して

靈に復活し来りて

人生目的を肉の幸福とせずして自我発

展を目的とせば肉の苦は当然のことにして此の苦感によって自己を發展し靈我を開

発すべき利器なりと知るときはすべての苦に對して、如来の増上力を縁として之を

砥石として自己を磨くの縁となす。

吾等は自分勝手の悪き心、朝から晩まで苦しみ悩みにみだされて居る折々は己が悶

えに己れながらもいかんともいたしがたき時あり。

此悩み悶えの心は何人に訴えても

ウワベでは同情は寄せたるようなるも其内心にはさてもさても愚痴の多きものよと思

うて真実に我が悩みをわけてくれる人はない。

しかるにたつたひとり真から我悩みに

どん底から同情を以て私をあたためて悶えをあたたかに融合して安らかにかえて下さ

る御方は阿弥陀仏のみにまします。

同情の慈悲を以て知り玉う御方は只一人の大ミオ

ヤ計に在す。

感情の靈化

感情は人の心理作用の中最も度の強きものにて、人の心理衷心にあつて内容に感ずる度の深きもの、苦樂憂喜その他人心活動の中最も内容深密なる機能なり。感情必ずしも野にあらず。孔子の、之を知る者は好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず。是知力に知り、意向に好み、感情に至て楽しむ。

宗教の独特の精髓は感情に求むと云うが如し。客体に対する愛慕渴仰の信念も高尚なる理想も、新鮮なる活氣及び道德的行為の蒸氣力を発すること甚深なり。悲壯なるは自己脱却の勇を奮い一切衆生の為には身を苦毒の中に止むとも忍んで終に悔いじとの超世專念の勇氣に万乗を弊履の如くに脱する如き心理は、是感情の信仰に属すべきものなり。

苦悩の主我

心情宗教の発足点は仏教には苦毒の感情を以て先とす。四聖諦のうち先づ苦諦を認め次に其の原因たる煩悩を退治す。

解脱宗教の発足点は苦の感情にあり。人は自ら苦毒たることを認めざれば之を解脱するの要あるを感じずるなし。人の身体の病にも苦痛を感じて療養の要を感じる如く、精神的宗教に於ても又然り。苦毒の感情は何より感ずとならば、天然の人は自ら顛倒して自己の身心土には脱却せざるべからざる欲性あるを識らず、顛倒して自ら苦を感じず。即ち四顛倒を根本とす。身は本空なるを実有と謂い、享受するものは唯快樂幸福のみを望み、心は無常なるに常に定まれりと謂い、法の無我なるを自ら自在なりと謂い、自ら顛倒して主我は唯幸福のみを追求し、名利権威求むるに随て遠ざかり、榮

耀快樂は陽炎の渴望に空しく苦しむ、哀れむべし。衆生快樂主義幸福主義は常に満足の感情あることなし。榮華の夢久しからず、幻の快樂唯愚夫を惑わすのみ。此の身を受く本苦に然ず。加うるにまた身心の苦を受く。之を苦々と名づく。天然の人は顛倒によつて幸福主義却て苦毒の感情甚だ多し、身心土悉く苦毒の感あらざるはなし。身心に受くる処は憂悲苦惱のみなり。

次に超然主義は曰く。此三界即ち世界苦毒充滿の処は実に厭うべし。世界は苦毒なり罪惡なり怨敵なり蛇蝎なり惡魔なりと、此世界を厭うこと甚だし。身は空なり苦なり、身心土ともに苦毒なり。空なり無常なり無我なり。この身心土を厭いて超然なる無漏の境に超入するに非ざるよりは此苦を脱する能わず、斯の如きの身心土は根柢より脱却するに非ざれば苦を脱する能わず、無為泥洹に身心共に滅して初めて寂滅為樂とは是小乗の執する苦毒と解脱となり。

同じく超然主義の進みたるに、苦とは天然の衆生は迷によつて苦と感ず。苦の体を

熟々つらつらん觀きたじ来くうれば空くうなり、幻夢げんむの如ごとし。夢ゆめの中に苦くと感かんず、覺さめ来きたれば苦くと感かんずべき物ものなし、已すでに生死しやうじの苦くなし。何いずれの処ところにか涅槃ねはんの樂らくを求もとめん。生死しやうじ涅槃ねはんは唯ただ昨夢さくむの如ごとしと認みとむるは空家くうけが執しゅうする処ところ、進すすんで、生死しやうじの体たい是これ涅槃ねはん常住じやうじやう絶對ぜつたい真心しんじんの体たいなり。この世界せかい及び身体からだと個人精神こじんせいしんとはこの絶對ぜつたい理性りせいの根柢こんていに立たてり。この身心土しんじんどには脱却だつきゃくを要ようすべき垢質くしつちゆう有あせり。然しかるに天然てんねんの人は脱却だつきゃくの要ようを識しらず。故ゆえに自ら主我しゅがを執しゅうし幸福主義きふしゆぎに托たくすべからざる世界せかいに托たくし自ら顛倒てんどうして苦毒くどくを感かんず。

然しかるに生死しやうじの苦くを感かんずる故ゆえに解脫げだつの要ようを識しる。

衆生しゆじやうは仏性ぶつしやう即ふつしやうすなわち理性りせい具ぐすると共に主我しゅがを執しゅうし、快樂かいらく即ふつしやうすなわち幸福主義きふしゆぎ実じつ有ゆうなりとの迷まよいがあつて、苦毒くどくの垢質くしつちゆう有あする所以ゆえんはこれを脱却だつきゃくする為ための勇氣ゆうきを鼓舞こぶしこの苦毒くどくに耐忍たいにんすべき戦争せんそうに勝利しやうりを獲えせしめんが為ための方便ほうべんと觀かんずる時ときは、苦くの感かんずべきなし。何ぞ必かなずしも世界せかいを棄すてて無為界むいかいに超入ちやうにゅうするを用もちいん。天然てんねんの人の主我執意しゅがししゅういと幸福主義きふしゆぎと三界さんがい即ふつしやうすなわち世界依属かいえぞくの天然的精神てんねんてきせいの顛倒てんどうを覺さとり来きたりて觀かんずれば生死しやうじ即ふつしやうすなわち涅槃ねはん、この生死しやうじ

の苦毒くどくを感じかんずる感情かんじようを離はなれて別べつに生死しやうじ脱落だつらくの阿弥あみの中うちなる真我しんがの心性しんしやうあらんや。

苦毒くどくの感情かんじようなければ脱苦だつく専念せんねんの勇猛ゆうもようを生しやうずるなし。また一切さいどを度どせんが為ためには忍終にんじゆう

不悔ふげの悲壮ひそうの甚深じんじんなる感動かんどうを生しやうずることなし。一切さいきやう享受じやうじゆする処ところに常に情じやうを充みしめば、

世界せかい依属いぞくを脱却だつきやくして大我たいがの力ちからに超入ちやうにゆうすべき動機どうきなからん。苦くの中に耐忍たいにんによりて剛毅ごうき

を鍛えきた、憂怖ゆうふによりて無生忍むじやうにんの必要ひつようを感じかん、天然てんねんの身心しんじん土どを脱だつして、阿弥あみの中なかなる自じ

己こたることを感ぜば、苦毒くどく即ち真しん正せいの靈福れいふくたるを感かんぜん。世よに苦毒くどくの感情かんじようなかりせば

健士けんし即ち菩薩ぼさつの理想りそう的活動きかつどうを為なすべき材料ざいりやうなからん。苦くあつて始はじめて菩薩ぼさつの利り他たの大だい

慈悲じひの価値かち顯あらわる。一切さいしゆ衆生じゆうの苦毒くどくは之これ大悲だいひの菩薩ぼさつを養成ようせいする処ところの資本しほんである。又また

恩寵おんちゆうを莊嚴しやうごんする処ところの金箔きんぱくと言いわざる可べからず。

煩

悩

(罪過感情)

衆生に苦毒の感情の因と爲る罪過の衝動たる煩惱なる惡賊ありて道德を害す。菩提心發起すれば自己の苦毒は忍ぶべきも道德を阻害する煩惱こそ力を竭して之を脱却せざる可からざるを感ずるに至らん。何ものかは煩惱なる。貪戾、慳吝、愚痴、傲慢、嫉妬、恨戾、覆陰、苦惱、等が内にありて縁に應れ境に對して動すれば發動して自ら害し且つ佗を書い、外には六賊ありて内面の德義を害せんとす。斯の如きの煩惱と罪惡とは、未だ宗教道德的情操發せざる程は未だ苦惱とせざれども、已に菩提心發しぬれば、内に菩提心の光りありて之を反映するときは忍び難く、いかがせば是の如きの罪惡を降伏すべきやとの念切なり。罪過感情に於ても、天然の人は罪惡は苦毒の如くに感ずるものに非ずして菩提心發さざる程は罪惡を照す光薄ければ左ほどに感ずるものに非ず。

超然主義。此煩惱に對する小乗の聲聞等は主觀的のごとく感じ、人は三界生死の苦は見思の煩惱による、煩惱の元因を断ぜざるよりは苦惱の水源を涸らし難し。意志を

断ずるに非ざるよりは煩惱を断ずる能わず、自己の苦を脱せんが為に自ら罪惡の源を洩し、而して煩惱は実に煩惱なり実に断滅すべしと。

次に大乘の空家は煩惱即ち罪惡も苦と同じく、煩惱本より虚妄にして昨夢の如し。夢の中に人を殺す、加害者も被害者も共に夢なり。何の処に罪あらんとは超然主義の罪惡に対する見解なり。

今は衆生煩惱の本体を能く推窮むる時は即ち是菩提の性なり。天然の人は自ら惑うて菩提を以て煩惱と為す。如來に対する罪過甚だ深重なりと云わざるを得ず。一々の煩惱を転ずれば即是菩提なればなり。吾人は阿彌の理性を具有しつつ自ら迷うて煩惱の奴隸と為らば、理性を統一せる如來に対して犯罪者たり。天然人の如く他律的に世間の律法制裁に対する罪は尚輕し、自己の理性を統攝せる如來に対する罪甚だ重し。自己内面の如來の聖意を瀆す罪深し。阿彌の理性即ち菩提を自ら惑うて煩惱と為す。天然の人の感覺欲即ち色欲の如きは聖を愛し道德を愛するの誤用なり。我欲転ずる時

は度生利物の欲望は成らん。何ぞ非理なる憤怒の勢力を以て己が不正を降伏するに用いざる。何ぞ懈怠を罪惡に用いざる。煩惱即菩提、汝が貪瞋の心性を断除して菩提を欲望し正義を衛るの意志あらん。貪って飽くこと勿れ上求菩提下化衆生を。憤って激して怒せよ自己の断惑の爲に。即ち知る煩惱即菩提なりと。

苦毒と煩惱との關係

苦諦は果にして煩惱業即ち罪惡は其因なりとは是迷界因果律なれど、必ずしも因果といへば、時間的に貪欲に貧の苦果、殺盜に短命貧窮の苦報の如きの関連は証明せざるも、貪欲主義には精神的貧苦に逼られ、瞋恚家は自己胸中の獄火に悩害せられ、殺生、偷盜、邪淫にも良心の苦悶は決して免るる能わず。貪瞋痴慢の如き悩は是苦悩の元因たることは否定すべからず。

帰する処、一切の苦々、穢苦、行苦等も皆之を苦と感ずるは之煩惱による。惑は顛倒より主我と幸福主義たり。幸福主義は決して満足安寧安立を齎すこと能わざるものなり。人は苦毒を厭うて之を出離せんと欲するも、生の苦悩は苦の元因たる煩惱を脱却するに非ざれば決して離るること能わざるべし。病を癒すに非ざれば苦熱は除き難く、今は煩惱の病によりてすべての苦悩の熱を發す。煩惱の原動たる主我は肉により我によりて衝動し、一切の煩惱を發す。この主我と幸福主義との惑により六塵境に対し縁に応れ思わずも罪業に陷る。

自ら苦悶す

いかにせん天然の人自ら苦悶を去り罪過を侵さざらんと欲するも、自己の力の及ぶ所に非ず。惑業の薪あらん限りは苦悩の熱火消滅し難し。

善導大師が、万劫修行実難続、一時煩惱百千交、若待娑婆証法忍、六道恒沙劫末期。貪瞋即是福四業、煩惱定是菩提因、此貪瞋火燒苦を驗するに先つて弥陀国に入らんには如かず。一食の時尚余あり、如何ぞ万劫貪瞋せざらん。貪瞋人天の路を障る。三悪四趣内に身を安く。

証法忍とは娑婆天然即世界依属の主我主義にてはとても罪過と苦惱とは離るること能わざるべし。主我と幸福主義では如何にしても苦毒と煩惱とを脱すべきに非ざれば、この自己精神の立脚地即ち主我を転ずるに非ざるよりは、離脱の道なかるべし。人には之を脱離すべき理性が精神と絶対精神との性能にあり。この真理に依るにあらざるよりは決して自己の力の能わざる所なり。

如来に依りて解脱す

天然人は身心土に於て転依すべき理法あるを識らず、主我心と快樂主義とにて身は実有と執し、天然顛倒なる主我は転依すべき理性あるを識らず。世界は究竟して依属すべきに非ざることを悟るもいかにせん煩惱と苦毒とは是衆生の顛倒より起る、所謂実有にあらざる身を実有と謂い、幸福快樂を受けんとのみ謂い、主我を計して常住とおもひ、依属に耐ゆべからざる世界に依属し自己の顛倒脱せんと欲するも如何せん惑は除きがたし。覚めんと欲するも顛倒醒めがたし。顛倒を以て自己の心とす。有為の世界に依属したる身の果敢なき、之を転依するに如かじ。転依とはこの天然の身と心と世界との主我を超え天然を越えて絶対の如来大我の中に真の自由を求む。所謂肉団心や天然の頼耶を越え絶対なる真神即ち如来の中なる自己なることを発見し、絶対無限の自己なることを意識し、楞嚴に所謂、肉団心を脱し頼耶を越えて超然として独朗天真、如来の心体現前、自己同一の心体現前する時即ち之れ十方微塵刹土も真心の中の一分たり。従前の我を無限の中に投じ、無限の恩寵ここに顕われ、入我我入、

肉団中の自己は弥陀の無限の真我の中に投じ、此時に従前の自己は主我命脱す。東坡が所謂直に一念より生じまた一念より滅す。生滅の主我滅尽の時、即ち我仏の大円覺と同じ。水を大海に投ずる如し。風中に橐を鼓するが如し。

尽虚空界に自己を求るに自己なし。身心脱落して洞然蕩々、已に絶対の中に亡して長く三界の苦福を離れ、忽ち大我の中に活眼を開きて十方を觀見すれば、曾て依属し來りし世界一切微塵の刹土は還て是真我の中の塵々なるを覺ゆ。已に如來の中なる自己たることを意識して主我亡じたるも、夫のみにしては未だ如來の中に活動するに非ざれば、未だ更生したる聖子にあらず。

歸命、融合、安立

歸命。是よりは歸命融合安立するの相を明さんに、衆生は天然の主我には、煩惱深

くして底なく、生死の海辺なし。苦を渡るの船未だ立せず。云何ぞ樂で睡眠せん。勇猛につとめ精進し、意を撰して常に禪に入ん。云何せん仰いで天を仰ぐも地に俯するも惡魔の充満せざるなく、内には煩惱五蘊の魔隊ありて内面の理性を障り、之を解脱せんとするもとても自己の力の及ぶ所に非ず、苦悶内に充ち遁れんとする處なく、解脱の門何處にかあらん。自己の心に問うも心は是顛倒迷乱して主我を執す。身に托せんとするも身は是れ四大塵素の仮和合物、世界は是れ依他規定、天地一切の處に自由の處を求むるなし。唯有、阿彌絶対の真我是世界万物の根底また一切の歸趣する處、如來に向つて投歸するに非ざるよりは解脱の道なし。

此身心土は共に依屬すべからず。超然として絶対に歸入せざるべからず。歸命の感情を導師觀經疏に韋提希夫人に寄せて歸命の心情を示せり。夫人自身の苦に逼て世の非常を覺るに六道自然の安心の地有ることなし。此に仏淨土の無生を説き玉うを聞きて穢身を捨て彼の無為の樂を証せんことを求む。夫人真心徹到して苦の娑婆を

厭いとい、楽たのしみの無む為いを欣ねがいて永ながく常じょう楽らくに帰きす。但ただし無む為いの境きようには輕やす爾やすにして階のほるべからず、苦く惱のうの娑しゃ婆ばは輒たちまち然はなとして離はなることを得うるに由よしなし。金こん剛ごうの志こころざしを發おこすに非あらざるよりは永ながく生しょう死じの元もとを絶たたんや。若もし親したしく慈じ尊そんに従したがうにあらずば何なんぞ能よく斯この長じょう夜やを免まぬれん、と。此この文ぶん意いは此この身みと世せ界かいとを客きやく觀くわん的てきに離はなることを欣ねがう如ごとくなるも、其その実じつ主しゆ觀くわん的てきにして故ゆゑに程ほどなく投とう命みょうして、無む生しょう忍にんを悟さとれり、今いまの文ぶんは歸き命みょうの情じようを表ひようするのみ。斯かく自じ己こ及および世せ界かい依え属ぞくを捨すてて、絶ぜつ對たい阿あ彌みの智ち願がん海かいに自じ己この一しん身しんを投とうじ、主しゆ我がを真しん我がの中なかに歸き命みょうすると、忽とつに爾にとして亡もうず香かう炉ろ一いつ点てん雪せつと消しょう滅めつしたり。一ねん念んが便すなわち永ながく三さん界がいの苦く福ふくを離はなれ、一いつ超ちよう直じき入にゅう如に來らい地ぢ。

譬たとえば日ひ出いでて衆しゆ闍あて尽こととく除ぞくが如ごとく仏ぶつ智ち光かうの輝かがきに無む明みょうの夜よは朗ほがらかなり。

歸き命みょう投とう入にゅう。永ながく忍にん土どの終おわり、心こころ亡もうじ身み没もつし、乾けん坤こん断だん破ぱす、身しん土ど心しんを挙あげて悉ことごとく歸き命みょうす。

融ゆう合ごう。(解げ脱だつと融ゆう合ごうとは機き能のう致ち一)

一抹の香煙は忽ちに第一義天に昇つて跡をとどめず、一掬の水は大海に投じて差別なく、我忽ち亡びて真我に投合し乾坤開いて無限の真心露現す、と。斯の如の説明は理に止りて未だ心情の妙味なきは是感情融合の道ならんや。絶対と融合の状、歆天喜地、身心融液不可思議のさま、何を以てか其妙味を比せん。

春の弥生の桜花はかすみの中に麗しき色と馥しき香を發して無情ながら天機の妙を洩して融合快樂の状態を呈す。神に三昧耶の深秘の奥室に絶えず無限の精神に融合し微妙自然の感情、身心融液不可思議のさま、深秘の内容に法身の妙容を感じ、心情には神人交渉し融合の妙感花の色香に比せんも比すべからず。深秘融合、最も麗わしく香しき最深最幽玄にしてまた深秘の神靈との交感によりて聖胎仏種子萌發して初めて聖法子と成る。是深秘交感融合は宗教生活の泉源にして其の聖種薰発の原となり、一切活動の原動力と成る。既に融合致一、入我我入、最深真我の自己として心情いつしか転じ、この有為の依身によるほどは八風のおとづれに喜怒哀楽の浪なきにあらざ

るも、忽ちたちまてん転ずること自在じざいなり。

心情しんじようが真我しんがに融合ゆうごう感応かんおうせる甚深じんじんの内容ないようは深秘じんびの中なかの秘密ひみつなれば決けつして他人たにんの窺うかがひ知るべきに非あらざれども、教主きようしゆ釈迦牟尼しやくわかむにが内容ないように充塞じゆうそくして掩おほうべからざる其容そのかたちは自おのづと表ひよう面めんに発現はつげんして阿難あなんを感ぜしめたる容みかおは是これなん大我だいがの無限むげんの真光しんこうの動機どうきに外ほかならず。即すなわち曰いく、

爾時しかのとき世尊せそん諸根悦予しよこんえつしよ姿色清浄しよせんじようにして光顔こうげん巍々きたり。時ときに阿難あなんは忽たちまちに聖旨せいしに感発かんはつせられて即すなわち合掌がつしようして白もうして言もうさく、今日世尊こんにちせそんよ青蓮しやうれんの眸まなり纖月せんげつの眉丹果まゆたんかの笑えみを含ふくみ玉たまうて白雪はくせつの齒はを露あらわし諸根しよこんに悦予よろこびあふれ、金色こんじきの姿色みすがた清きよにして光顔みかお巍々おほだかり。明浄すめるなる鏡かがみの影かげの表裏おもてうらに暢とおるが如ごとく威容みすがた顕曜けんぎやうにして超絶まさりしたまうこと無量むりようなり。未いまだ曾かつて御おん麗うるわしさ殊妙しゆみやうなる今日こんにちの如ごとくなるを瞻みたてまつりしことあらざりき。されば大聖たいしやう我が心こころに念言おんごすらく、今日世尊こんにちせそんは内容ないように奇特きどくの法ほうに安住あんじし玉たまう。

世尊せそんよ、弟子等でし大聖だいしやうを念思おんごし上たてまつれば歓喜よろこび内に悦予よろこびして自ら表みづかに現おもてわる如ごとく、たと

い世尊せそんといえども亦他またたの如来にょらいを念ねんじ玉たまいて其その投映とうえいの内容ないようが表おもてに露あらわれて斯かくは在あらせ玉たまうに非あらずや。何故なにゆえ其威神そのいじんの光こう々たる乃すなわち然しかるや。とは、教主きょうしゅ釈迦牟尼尊しやくかにんそんの感応かんのうしたる阿弥あみに非あらずや。曦光ぎこうの流彩りゆうさい無心むしんにして十方ほうに朗ほかに阿弥あみの内容ないようは絶対ぜつたいにして万法まんぼうを含ふくんで法界ほうかいに周あまねし、心華しんけ開ひらく時は孰たれか感ぜざらん。孰たれか融合ゆうごうせざらん。

華嚴けごんに如来にょらい甚深境界じんくわいじんくわい其量等虚空きりやうどうこくう。一切衆生いつさいしゅじやう入而実無所入いっさいしゅじやういつてしかもじつにいとこなし、と。

安立あんりゆう。主我超入しゅがちやうにゆうして大我だいがの中に融合ゆうごうしたる状態じやうたいは機能致一きののうちいつに内うちに非あらず外そとに非あらず中間ちゆうげんに非あらず絶対無二ぜつたいむに。是これよりは大我だいがの中に安立あんりゆうして表面ひやうめんには個人こじんなるも内面ないめんは絶対ぜつたいと致ち一いつ、如来にょらいの中の自己じことしてより従前じゅうぜんの自己じことは更転かわりして所謂いわゆる変易へんにやくの心こころ、歡喜かんぎの光ひかりに内容充ないようみちされ、平和へいわにして自然しぜんの靈福れいふくを感かんず。八風眼耳はうがんじを過するとも内容ないようは如来にょらいの中に碇てい泊はくし、六賊競どくそきそい来きたって侵害しんがひせんと欲ほつするも如来にょらいの城廓じやうかくに安住あんじゆうして怖おそるるに足たるものなし。

阿弥あみに安立あんりゆうせる心情平和しんじやうへいわの靈福れいふく、歡喜かんぎと云いわんか安寧あんねいと云いわんか、暫しばらく喻たとえを以もつて其その

状じようをのふれば、即すなわち機能致一きのうちいつの状态じようたいなり。譬たとえば天てんの如ごとし仰あおげばいよいよ高たかきが故ゆえに、猶なおし春日しゅんじつの如ごとし暖和だんわにして能よく化育けいくするが故ゆえに。秋月しゅげつの如ごとし清涼しやうりやうにして煩惱ぼんのうの熱ねつを除のぞくが故ゆえに。猶なお大海たいかいの如ごとし広蕩かうたうとして無辺むへんの故ゆえに。山王さんおうの如ごとし八風ぱうふうの爲ために動搖どうりやうせざるが故ゆえに。雪山せつせんの如ごとし情操皎潔じようそうかうけつの故ゆえに。浩氣こうきの如ごとし新鮮しんせんなる活氣かつき与あたへらるるが故ゆえに。猶なお大地たいちの如ごとし愛憎あいぞうなく公平こうへいの故ゆえに。帝王ていおうの如ごとし神聖しんせいの命令めいれい性せいの故ゆえに。判官はんがんの如ごとし情操じようそうを判はんして正義せいぎならしむるが故ゆえに。浄水じやうすいの如ごとし心情しんじようの弊垢へいくを洗除せんじよするが故ゆえに。火王かおうの如ごとし一切いっさいの垢質くしつを焼滅しやうめつするが故ゆえに。蓮華れんげの如ごとし世間せけんの汚泥おでいに染そまざるが故ゆえに。大乘だいじやうの如ごとし一切いっさいを重担じゆうたんとして生死しやうじを出いづるが故ゆえに。虚空こくうの如ごとし世界せかいに依属えぞくせざるが故ゆえに。猶なお雷電らいでんの如ごとし未覚みかくを覚かくするが故ゆえに。梵天王ぼんてんおうの如ごとし善法ぜんぽうに最上さいじやうの故ゆえに。獅子王ししおうの如ごとし畏おそる所ところなきが故ゆえに。象王ぞうおうの如ごとし普あまねく調伏ちやうぶくするが故ゆえに。大地だいちの如ごとし一切いっさいの功德くどく生ぞくずるが故ゆえに。大宮殿だいぐうでんの如ごとし心安住こころあんじゆうするが故ゆえに。城廓じやうかくの如ごとし六賊ろくぞくに害がいせられざるが故ゆえに。

人生の幸福と不幸

人此の世に生れ此の生をして幸福ならしむるとまた不幸ならしむるものは其の精神
いかにあり。人生の光明快活の方面なると他は暗愴憂悩の方面とを取るあり。真の
幸不幸は外界の周囲の境遇よりは寧ろ各人の精神に在って存せり。教祖釈尊王宮
榮華の夢は還て憂鬱の動機にして、三衣一鉢樹下石上にして初めて真の幸福を発見し
たる如きは凡人の得て学ぶべからざるものと云うべからず。釈尊王宮に在て深く憂鬱
に耐えざりしは五欲の豊饒其のものに非ずして、未だ精神に斯の光明を発見せざる
が故なり。樹下石上に於て真の幸福を感じたるもまた然り。樹下石上必ずしも人生
の幸福と云うべからず。真の幸福を得たるは外界に得たるに非ずして精神に於て發得
したるなり。人の釈尊の如く無限の光と永遠の生命との中に妙樂世界を発見し無限の

幸福は此の永遠の泉源より感ずることを得。

光明に向える人

古人曰世に処して成功する所以のものは其の才能に因るが如く其の氣質に因るはまた大なりと。然るに此の氣質なるものは人間の性情の調和宜しきものは自ら如何なる境遇にも能く安忍し周回の人に対してても鄭重と親切を以てす。されど其の氣質なるものの生得性情の調和宜しからざるものも其の自己の氣を如来の光明によりて温められて靈化する時は氣質を転じてよく調和す。

光明方面に向える精神には一切世間の事物に対して一種の歡喜光を見出すべし。斯る人は如何なる大不幸の中にも安慰の光明は心の奥より放ちまた大失敗の中にも成功の日光の映ぜるあり。彼等の眼に触れるものは一として歡喜の光放たざるなし。

不幸ふこうを転てんじて幸福こうふくと化かし失望しつぼうの闇やみを開ひらきて希望きぼうの光ひかりとなすものは益々ますます是これは歡喜かんぎ光こうなり。
世よに光明こうみょう方面ほうめんに向むかう人程ひとほど幸福こうふくなり。光ひかりに向むかう人ひとは常つねに燦然さんぜんたる光輝こうきは眼裡がんりに輝かがやき光ひかりたる姿容しきよう容貌ぼうに現あらわる。愉快ゆかい快活かいかつ歡喜かんぎの光ひかりは心中しんちゆうに離はなれることなし。いかなる場合ばあいにも麗うるわしき色いろを變へんずることなし。其その心こころは光明こうみょうを以もつて色彩しきさいを飾かざり。光明こうみょうに向むかえる人ひとは雄大ゆうだいにして快活かいかつなり。黒雲こくうん暗憎あんそうたる中なかにも道德どうとく的てき光明こうみょうを認みとめ、たとい眼前がんぜんの不幸ふこうにも將來しやうらいの希望きぼうを信しんじて快然かいぜんたり。聖法せいほう然ぜんが七十よそひ余さい歳さいの高齡こうれいに臨のぞんで一旦たんねん念ねん仏ぶつ弘通くわうつうのため種々しゆじゆの迫害はくがいに遇あひ土佐とさの国くにへ遠島えんとうせられたるに臨のぞみて、神色しんしよく自若じじやくとして、我年われねん來都會らいとくわいの化益けやくは已すでに久ひさし辺鄙へんぴの教化きやうげを志こころざしたりしに幸さいわいにも年來ねんらいの宿願しゆくがん果はたすも朝恩ちやうおんなりと宣のたまし如ごとき、実じつに快然かいぜんたるに非あらずや。

光明こうみょうに囲かこまれつつある身みには不幸ふこうと不ふ滿まんの闇やみは容いるべくも非あらず。失望しつぼう落胆らくたんは夢ゆめにだも見るべきなし。寔まことに光明こうみょう方面ほうめんに向むかえる人ひとに真しんの幸福こうふくは相伴あいともないて離はなれざるなり。

滅罪生善増上縁

如來の光明は吾人の罪惡を亡ぼして正善なる人に復活せしむる増上の力あり。これを滅罪生善増上縁と云う。

斯の増上の光明滅罪の恩寵を獲んと欲せば吾人須らく自己の罪惡なることを自覺せざるべからず。自己の罪惡を認むるは救靈の恩寵を請求する動機なり。然るに多くの世人は謂えり。自分はさまで罪惡なるものにあらずと。是如來の恩寵を遠かる所以なり。吾人は未だかすかに如來の光明に接せざるむかしは自分の罪は認めざりき。今はかすかになりとも如來の光明によりて自己の肉我を返照するときは吾人の肉は満身唯罪惡のかたまりなり。楞嚴經に阿難陀が幻女摩登女の誘惑の因縁しるされたり。阿難陀は仏弟子の中に於て最も容貌の麗しき僧たりしと。或とき舍衛城中を回り

て鉢を乞う。其姿、眸は青蓮花の如く唇は丹果に比い面は満月の円なるに似たり。
服を調え衣を正しうして洋々として徐に歩みて次で姪女摩燈女の門に立ちて乞鉢す。
摩燈女曾てよりアナンの端嚴なる容貌を見て恋念断つこと能わざりき。時にアナンを
嬌り請じ一室に容れ魅術を以てアナンを誘惑してついに聖きを破り汚泥の淵に陥さん
とす。已に危機一髪の際に迫りしかば世尊は祇園精舎に在してアナンの境遇を憐み彼
が火坑に墮せんとするを救わんが為に聖き一すじの光は彼一室を照せり。忽ちに一室
は夜明て窓を開ける如く一切の障碍するものなく祇園の会座はアナンの前に歴然た
り。アナンこの清き光によりて頓に魔魅の酔は醒めて赧顏慚愧に堪えざりき。アナン
は驚き恐怖して愧かしながら世尊の前に跪きて己がいたらざることを悔い己を剋め
骨を刻み己が罪を懺悔し道心の呵責煩悶云うばかりなし。時に世尊はアナンに宣うに
は、アナンよ、汝彼の摩燈女を恨むなかれ。いかにとなれば汝が罪惡の要素なるもの
は已に汝の胸中に潜伏せしなり。摩燈汝を誘惑せんと欲するも汝が胸中に煩惱の賊子

伏在せざらましかば誰の魔魅の毒をか感ぜん。汝は摩燈の誘惑によりて始めて汝が身中に煩惱の賊が伏在せることを識りしや。賊は汝が身と共に往昔より曾て潜伏したりしなり。己が肉の闇窟の中に賊は先天的に眠伏せるものなり。斯の賊を制伏せんと欲せば先づ宜しく賊の所在を明察すべし。戒は能く賊を発見し定は能く賊を捕縛し慧は能く是を裁断すと。実に聖弟子アナンすら斯の如し。ましてや吾人が自ら罪事なしと云うは実に無智の甚しきなり。

吾人が此肉体は賊の巢窟なり。若し罪惡の種子にして潜伏せざりしかば外界の誘惑また如何ともすること能わざらん。吾人は朝より夕に至るまで、歴縁対境、貪瞋競い起り五欲交々出づ。一切身の行為口の言語に於て罪惡の現行するは本皆自己に眠伏せる胸中の賊、手足と言語をもて外界に發動したるものなり。

吾人が身内に八万四千の煩惱ありて潜伏すと実に恐るべし。若し人道徳上の將帥たらんと欲せば外界の敵は恐るに足らず全く恐るべき所の賊は己の肉我の窟に伏せるも

のにあり。八万の罪惡の巨魁は何ものぞ、此巨魁を捉えて之を制伏するにあらざるよりは八万の罪惡との健闘はついに敗北の止むを得ざるに至り、八万の魔軍に捕虜となりてついにきえぬ火の中に投ぜられん。思えば吾人の本心は道德上の偉人たらんことを希望す。しかるに自ら熟案するに外界には眼にまた耳に罪惡誘惑の動機処々に充満せり。退きて自己の内状を搜るときは八万の煩惱潜伏せり。機会だにあらば己が欲望満足を得んものと奪略劫掠、忿の爆裂、憤の火薬、嫉忌の劍、復讐の鉞など五兵精を研き粹を練り其勢とても当るべきものにあらざと見ゆ。自ら自己の全身を探るに肉体として全体四支五官より内界の一として賊の所有たらざるなきが如し。しかるに八万の賊の巨魁は肉我なり。此肉我なるものをいかにしてか捕え、いかにしてか征伐せん。肉我を制伏せんには自己真深の奥に潜める真我の主によるの外に魔賊にうち勝つべき道なし。真我は如来の恩寵によらざれば活るべからず。ここに於て如来の一大靈力を仰ぎ八万の光明を以て八万の魔賊を討伐すべきの真理を聞けり。

我われ今いまは賊ぞくの爲ために全ぜん土ど掠奪りやくだつせられたり。最も早はや我われには道徳どうとくの日ひの光ひかりは已すでに隠没おんもつせり。我われは闇夜あんやをたどりて地獄ぢごくの消えぬ火ひの燃る獄ごくに趣おもむくの外途ほかちうなかりし。斯しかる境遇きやうぐうに陥おちりたる我われにも心こころの奥おくにかすかの光ひかりはまた全まったく消えやらであり。誰だれを帥すいとしてか魔軍まぐんを追おいて汚よごれぬむかしに復かえさんかに思おもひ煩わづらいしに、聞きく、人ひとには良心りやうしんなるものあり然しかれば此良心このりやうしんを帥すいとして世間せけんの道德どうとく即すなわち道義どうぎ的てきの軍法ぐんぽうを以もつて罪惡ざいあくを討伐とうはつせば必かならず勝利しょうりの望のぞみあるに似にたりと。習慣しゆかんに規定きていせられたる良心りやうしんを帥すいとして道義どうぎの学説がくせつを軍器ぐんきとして猛もう烈れつを逞たくましうせる肉我にくがの罪惡ざいあく不道ふどうを制伏せいふくせんと試こころみしも、いかがせん。肉我にくがの罪惡ざいあくは暫しばらくの程ほどは良心りやうしんでふ声こえに驚おどろき一歩退しりぞきしかと想おもひしは瞬またたく間にて、罪惡ざいあくはまたしばしば良心りやうしんの旗下きかに迄迫までせまり来る。憐あわれなる哉良心かなりやうしんなるものは本習慣もとしゆかんに規定きていせられたる迄までの身み分ぶんにてあれば肉我にくがの賊ぞくの爲ためにいつしか習翫しゅうがんと變化へんかし曾かつて罪惡ざいあくと感かんじ来きたりし良心りやうしんは竟ついに習翫しゅうがんの爲ために痲痺まひしてついにこは凡夫ぼんぶの当然とうぜんのこととなり、敢あえて責せむるに足たらざるとまなでに成なりにけり。さてさて心こころは無常むじようなり怙たのむべからず。曾かつて朕ちんが股肱ここうとまでに頼たのみ

来りし忠臣はいつか一変して賊名を負わざるの止むを得ざる迄に転変するものと見れば、良心も怙みとするに足らざるか。されども内心の深き奥に潜めるものは未だ幽かなる処に光を求むるの望は絶えしにもあらねば、深き坑の底より理想なるものかすかに空に輝く星の光をたよるばかりに百敷や古き軒端のむかしを偲びいかがしてか自己心源の奥に潜める真我をして一たび復活せしめんとす。

心源の真我を復活せしめ全く肉我を降伏せしめ八万の魔賊を制伏して還つて彼らを帰化せしめて真我の忠臣たらしめんと欲せば、是には唯一の道あるのみ。そはいかなる道か是ならん。そは他にあらじ、真我のミオヤなる如来天真我即ち如来の一大光明のみありてこの靈我を復活し靈の生命としてこれは不可思議の靈力を与えて健闘に必ず勝利を得べし。如来には八万の光明ありて八万の賊を討伐す。

不思議なる如来無上の愛は罪の為に隠没せられたる我を深き心の底より喚起し真理の光は明星のかがやく如くに我を覚醒し、如来は我に注ぐに聖き靈の水をもて我を

死より復活せしめ、無限の靈力によりて肉我を滅殺するに至る。主我已に滅殺するに至らば眷屬たるもろもろの煩惱恐るるに足らず。斯光明斯靈力が吾人が罪惡の我を滅殺して真我を蘇生しむるの聖靈なり。是よりは靈應身は我が心靈を化合し來つて常に我頂に在せり。愆惡の生命即ち活ける觀世音なり。視よ、觀世音の聖像には宝冠に一の立てる化仏あり。抑此の化仏は是他ならんや。アミダ如來の分身なり。即ち觀世音の腦殿に如來の分身たる靈應常に化合し來りて在ますことを具體的に表示したる形相なり。故に觀世音は如來無限の泉より湧出する慈悲即ち博愛をもて衆生を憐れむこと慈母の子に於るより甚しことは如來の靈應在せる人の精神は何人もかくなるべしとの代表なり。ア、聖なる哉如來の恩寵、即ち光明は我らが罪惡を没し正善たる聖觀世音と靈化し給う。増上の力実に不可思議なり。如來の恩寵の外に罪惡の深坑に没したる我を救い出し聖旨に活きて觀音として復活せしむるの靈力あるなし。

是の更生に二種あり。一に精神の更生と二に身体の更生となり。已に如來の聖子と

なり増上の力によりて罪の我は命終して靈の我と生れ更りしを精神の更生とは云う。
これ活ける觀世音なり。有漏の依身は変らねど神は浄土に栖みあそぶと云う身とはなりぬ。

如來の聖寵により聖子の員となりしからはこの上はこの依身のあらん限りはいかに、如來は我に増上の力を加え給いて聖旨に仕うることをうべし。

降魔の増上縁

魔は此こには弊惡と訳す、多欲の故なり。又殺者と名づく、人の善を害するが故なり。又障者とも云う、道を障るが故なり。

如來の目的衆生の心靈を真善美の極なる靈界に攝取せんとする聖意に對して障礙をなす處の魔力が世界に存在せり。こは天然界中に存在するも人の肉の中には是と相應せ

る魔力まりよくの存在そんざいするに非あらざれば善道ぜんどうの障害しょうがいとなるべきものに非あらず。

魔まに四魔しま十魔じまを挙あぐ。今いま四五の魔まを挙あげて降魔ごうまの相そうを示しめさん。人ひとには肉にくと靈れいとの二性せい存そんせるも天然てんねんの人ひとは肉我にくがが唯肉ただにくの幸福こうふくのみを求め肉にくの快樂けらくを以もつて人生じんせいの目的もくてきの如ごとくに観かんず。肉我にくがの弱点じやくてんを見透みすかして魔力まりよくが此この肉我にくがを誘さそいて惡道あくどうに墮落だらくせしめんとす。此この魔力まりよくには肉我にくがは如何いかに智力ちりよくが銳利えいりなるもいかに英雄豪傑えいゆうごうけつも金錢きんせんの財力ざいりよくに富めるも夫等それらの力ちからの強ければ強き程却つよほどかえつて惡魔あくまに便宜べんぎを与あたえて魔魅まみに感かんじ易やすからしむ。世よを見渡わたせば上王公貴人かみおうこうきじんより下卑賤しもひせんの者ものに至るまで此この魔まの為ために誘惑ゆうわくせられて身心しんじん悉ことごとく肉にくの奴隸どれいとなりて地獄ぢごくの闇黒あんこくに向むかうに至る。

斯かく惡魔あくまの旗下きかに捕虜ほりよとなりて闇黒あんこくの獄ごくに向むかいつつあり。身心しんじんに靈妙れいみょう不可思議ふかしぎの光ひかりを与あたえ、肉心にくしんの奥おくなる靈れいを覺醒かくせいせしめ、衆生しゅじやうの心こころを捕とらえたる魔網まもうを穫裂かくれつして靈れいを復活ふっかつせしめて聖せいにならしむるは如来にょらいの増上力ぞうじようりきなり。

五蘊魔ごうんま。煩惱魔ぼんのうま。死魔しま。天魔てんま。是これを四魔しまと云いう。

五蘊魔とは色受想行識に關する魔力。身心は魔の巢窟。色蘊は此の肉体なり。諸物質元素の蘊まる処、いかに斯く肉に魔は宿れるか。否もとより此の肉色も能く肉体の真面目を看破する時は魔の托する処に非るも此の諸の元素の蘊りなる仮和合の姿色に実に凡夫を魅醉せしむる魔力存せり。

嬋媚たる鬢髪、婉轉たる蛾眉、青蓮の眸、紅唇は白歯を含み芙蓉の顔、一たび笑えば百の媚、一々解剖してもとの元素に復する時は十四の元素の聚積せる肉団なれ共、髪は紺青の如く、容は麗かに雲間の月、丹果の唇、白雪の齒、惡魔は如何なる魔術を以てこの元素を加え集めて、斯くなまめかしき色に巧言令色の術を以て愚夫の春情を蕩かさしむるや。

肉団を覆う一重の皮は三軍の帥の魂を奪い四大仮和合にあやつる魔力に城を倒け國を傾く。されば仏在世の時に吉星長者の姫の魔魅にかかりて貞潔なる王后を親ら射殺さんとしたる王あり。又彼の英雄アレキサンドルは戦う処勝たざるなく向う処降

らざるなきも王自身は某姫の明珠の眸に含める魔力に魂を奪われしに非ずや。楚の項羽の如き豪傑も悪魔があやつる色蘊の色香に捕われたり。殷の紂王は二十九代の主遂に姐己の色魔に魅せられて殷の六百年を亡すに至れり。又淫声の凡愚を誘惑して人を悪道に墮落せしむる魔力の伏せること已に道果を得たる舍利弗さえも緊那王が弹琴の一曲に計らざりき緇衣の袖を翻えして舞わしめられしと。淨瑠璃なども人の心を酔わしめて墮落せしむることあり。真理の光を離れて迷う時は眼にも耳にも鼻口舌身として魔の誘惑に陥らざるなし。

憐れなるかな凡夫。仮色の為にほだされ唯此の罪の伏せる肉の慾を恣にして此の心靈の宮を汚して悪魔の巢窟となす。

唐の玄宗の如き楊家が女の容色殊に麗わしき処に魔力にかかりてさまでに暴悪ならざりし玄宗も遂に肉の奴隸となり、驪山の華清宮に霓裳羽衣の曲を舞わせて宴楽する処はからずも安祿山の反逆起れり。

人の容の美なるもの固より魔なりと云うには非ず。魔に便りを与えて容易ならしむる性質なり。いかにとなれば異性をして之に惑い易からしむる故なり。

妖色自身に於ても自ら其容色に誇り動もすれば色の為に幸福を獲んとする傾向あるは是不祥なる兆なり。

心光によりて正眼に観じ来れば容色必ずしも不祥なりとは云えず。人の容貌の殊勝なるは過去に於て能く忍耐即ち能く違順の境に對して安忍し瞋恚嫉妬等の情なく柔和貞順の報として衆人に愛敬せらるる容色として現ずるなりと。

又生物進化の理によりて見るも生物が雌雄淘汰の数千万代に進化し来りし結果として美に発達せりと。然れば肉体容色の美なるも進化の程度高きに隨いて美も又優たりと云えば美は美なり。

肉体は心靈を宿す処の宮にして最靈なる聖靈を依する処又如来増上力によりて法身隨縁の能力を顯さんが為の色身とす。

生理規定の生殖作用の必要より雌雄相愛の情と相愛の相を表せん為に色相の美として現じたるものなり。

其の目的は生殖にあり。容色の美は手段として仮象としての現象なり。然るを凡夫是を覺らず肉の快樂を目的の如くに観ずる為に惡魔が其の弱点をつきとめて遂に己が眷屬とし肉の奴隸たらしめて闇黒の中に墮落せしむ。

如來心光の増上力によりて心靈覺め来れば肉の仮相に眩惑せず、心靈によりて他を愛するに至る。

如來の愛より出づる愛はすべてと同一の大なる愛が我と彼との間に顯わるる愛なれば、相和親愛の情いと濃かなるも、共に清き愛より衝動し共に清き國樂しき園に聖衆の親友の如くして聖旨を相互に勧め共に善知識と成りて真善美の極に向いて進むことを得。

受想行識は是人の精神の能力を四分類したるなり。受とは感覺、此の感覺に魔が便

りを得るとは、此の感覚なるものは人の五官が外界の色声香味触の刺激によりて生起する処の心の作用を云う。此感覚なるものは外界と内界との交渉によりて現れ来る心の象なれば動すれば此の間に魔が便りを得て人を悪道に誘惑し人をして遂に五欲の奴隸とし肉慾の餓鬼に陥らしめんとす。たとい欲界に好色美声あるも人に是を視聴する感覚なからんかいかなる好色も美声も敢て感ずべきなからん。

人の視覚に映り来る物、色は何ぞや。古代の哲学者たちは人の感覚は能く人を誤らしむと。たとえば針を以て我が皮膚を刺す時は忽ちに痛覚を感ず。然るにこの痛覚は針の方に在りや將た人の皮膚に在りやとならば針にあらずして痛は皮膚の方に感ずるならん。是と同じく外の物色を見るも感覚は外にあらずして己が視覚にあり。若し人のすべての感官なからんか、雷空に響くとも音なく日光世界を照すとも明の感ずるなからん。

そして感覚には対象の物質なくして視ゆることあり。幻術師の幻を現するに忽然

として男女の姿と現れ、人の之に對する視覚は全く物象と同じく異なるなく、また人の肉眼に見えざるも能く人には美人と視ゆるも明鏡には狐狸の姿なるあり。或幻術師が長竿を立て一の可愛き童子を其の竿に登らしむ。衆人は是を視るに全く實際に之を視る。然るに写真に之を撮影する時は写真影には唯竿のみにして童子の影なしと。又或写真師が或る僧の一人の影を撮るに、撮り終つて其の影を見るに僧の側にいかにも恨めしげなる姿をなす婦人の影を現じたり。写真師怪しみて其の僧に問うに、其の僧の曾て蓄えし妾の影なりしと。其僧他の妾を寵愛して先の妾を疎んず、故に先の妾之を恨み遂に自殺せしなりと。肉眼にて是を見ざるも撮影に現れしなりと。又視ゆる幻影は写真には現れずと。して見れば人の感覚は魔力に感ずべき性能存せり。

人が感覚慾魔の為に心靈を汚し闇黒に墮し地獄に陥らざるもの稀なり。目の色に耳の聲に鼻の香に舌の味における之に同じ。

斯く人の肉の感覚なるものは斯の如き不完全なるを利用して以て惡魔が誘惑して人

を墮落せしむ。或は妖色の美を呈し或は眼耳の慾よりして蟬妍たる鬢蛾眉の黛に粧をして愚夫の眼に便りして遂に曾て偕老同穴の契り深き貞潔なる良妻を厭惡し或は正宗の樽の中に潜伏したる魔は遂に愚夫の舌を誘惑して神經を痲醉せしめて曾て平和なる家庭に風波をおこし遂に家を破る。

また肉的魔は蘭若の修行者の為には最も恐るべき阿房羅刹の相を現じて畏れしめまた最も可愛の王女と現じて行者の春情を促し、また幻覺の中に種々の天像菩薩像を現ず。幻覺錯覺し易き腦を有せるものは固より健全なる精神にあらざれば自ら理性をして感情等を自制する力欠乏するが故に慢心を生じて後錯亂するに至るが故に、如来の増上力を頼むなく専ら自力を怙むが故に挙高して精神を錯亂せしむ。

自己は是罪惡の凡夫なれども、如来の本願によるが故に我らを憐みて勝縁勝境を示し給うと決心する時は此の魔事の難を免るる事を得べし。

次に想蘊魔とは想は想像また感情にも通ずべし。人の感情なるものは肉我の中心点

にして肉を我と執するものは感情なり。肉の幸福を望み快樂を冀う中心点は感情なり。宗教生活の中心点も感情なれば如来の慈悲を感じるに感情に融合して全く如来は我がものとなり我如来の中にあると感ずれども、また反対なる魔の為に最も深く感染するも此の感情にあり。

若し感情上に惡魔のために障られんか、世の罪惡を喜び他人を惱し人を苦しめんことを却つて樂しとなす。

人には同情ありて自他の苦樂を共にするは是正しき心情なり。然るを他を苦しめ人を悩ますを以て己が快樂を感じる如きは是情魔に非ずして何ぞや。其の最も甚しきに至つては殷の紂王が其の愛妃妲己の甘心を求めんが為に炮烙の刑というを行う。初め南庭に五丈の銅の柱を二本立て上に鉄の繩を張り其の下に炭火を熾んにし罪人に負わしむるに石を以てし繩の上に責め登して是を渡らしむ。罪人氣力疲れて炭火に落ちて焦死す。姐己是を見て大いに興じたりければ後には罪科なき者まで妃が甘心を得んが

為にこの刑を行ふにいたれり。或は又人の幸福に對し嫉忌を生ずるあり。

感情魔とは一家団樂の幸福をも一度人の感情が魔の為に侵されんが忽ちに風波を起し昨日の天上の樂園は今日は忽ちに変じて修羅の鬪諍と化し来る。曩に偕老同穴と契りし睦ごとはいまはうちかわり、君子として世に称せられし良人も一旦情魔に侵さるる時は偕老同穴の契り深かりし貞順の婦人の顔をも見るをさえ厭惡して、妖魔の為に惜しむ可き紳士をして肉の奴隸とし情魔の為に捕虜とせらるるに至る。また世に賢婦と称せられし貞婦も情魔の為に乗ぜらるる時は貞潔の志操もいつしか乱れて墮落の淵に沈み貴むべき良心もはしく魔の為に滅亡せらる。世に情魔というものなかりせば世人が理想せる地上の天国は何れの里にも又いかなる家庭にも実現せらるべきものを、可憐青年男女も情魔のために侵害せられて往昔青雲の志をして蹉跎たらしめ空しく塵埃の裡に葬り去らるるもの数うべからず。

かかる情魔の難を遁れて人の心情を潔からしむるものは如来の心光増上力なり。

実に此の弱きものに偉大なる力を与えて情魔の流に溺るものを救い給う。吾人の弱き情魔の焰が胸に燃あがらんとする時には、ただ聖きみ名によりて聖きみむねを仰ぎまつりて、聖きミオヤよ、我を汚より救い給えと祈念するとき一点の光は吾に清き道を示し給う。

ああ危い哉、若し吾人は如来の聖き光の増上力なかりせばいかでか情魔のわなにかかりて獄の火に焼かることを免れん。生理の自然なる力かはしらねど何故にこの肉に賦するに情魔に感じ易き性能を以てしたりけん。

何ぞ図らん、斯る弱点のなかに危難と戦えるこそ勝利の名譽たることを頭わさんが為なるを。感情には種々の弱点がある、例えば情に己が愛者の悪は悪と感ぜず、己が憎む人の善を識るの明を翳す。況んや己が弱点は我愛に昏酔して之を識るの智を眩す。この弱点を機として魔が人の感情に闖入して己が眷属とし己を恣に快楽の器にせんとす。故に己が肉我の情を恣にして或は憤怒し或は貪戾し嫉忌し挙高と非道を樂し

み人の悲を喜ぶ如きは現に其情魔に侵されしものにて彼はも早や魔の眷属なるものなり。

人は情魔の巢窟とならんか、遂に情操が魔の配下に基礎をかため其の郷党隣里に非常なる苦辛惨憺なることあらば彼が感情は非常に喜びを生ず。他人に幸福ある時は己れ愁憂苦惱し人の道德上に人格の高きことを厭惡し、仏陀の聖教を憎惡し、人をして闇黒の獄に入れて苦悩を感じしむるを己が快として、己れ亦之よりは一層酷しき獄の火に焼かるべきを知らず。

如何に大廈高楼なるも一点の火の為に焚き尽さると同じく、いかに柔和なる家庭も此の魔の為に忽ち破壊せらる。ペスト菌の為にいかに健康の身体も忽ちに斃さると同じく世に高等なる人格と称せらるる人も一度情魔に侵されんか忽ちに人格は墮落するに至る。

人は全く弱きものなるを自覺し常に如来の心光増上力によらざれば危うかるべきを

感じ、仏光を離れず己が心情の力と仰がば斯かる危難を免れて一家の平和一身の安全も得らるべし。

いかに如来は吾人の心情の増上縁となるかとならば、吾人の心情は我愛の為に昏酔して如実に判断するの明なく、端なくも魔の為に眩惑せらるるも、若し如来真理の鏡の前には私なしに如実に判決し愛憎の為に眩まされず。

たとい他人に対して己は非をも是として強いて通さんとするも、神聖なる聖旨の裁判は我に宣告するに汝が非理なるを示す。神聖なる聖旨の前に諍うべくもあらず。人の感情は永久不変のものに非ず。故に転変常なき感情に一任せずして永遠変らざる如来心光の増上力を規とすべし。

ここに一人の紳士あり。其の地位も財産も名望と云い人格と云い市内に指を折りて数えらるべき好紳士なり。是が家政の内助者たる令夫人は其の器量万人に勝れ其の容貌の麗しき怜利の質貞順にして能く随い実此の君子の好配とし其の家庭の暖かなる

こと常磐の春この家庭を去らず。三子二女は学校の成績概して優等ならざるなし。此
の家庭の心霊上の幸福はいざ知らず実に世に人間とし此の紳士程に幸福なる家庭は稀
なるべしと見聞の人をして羨ましめたり。かかる幸福に充さるるも未だ心霊は一点の
光なき時は其の間隙を機会とし悪魔はいと麗しき家庭を見事に顛覆せんとす。悪魔謂
えらくいかに人格高きと云うも彼が精神に高等なる宗教なきが故に早晚吾が手に入り
て吾等が快樂の料とせん事必定なりと。悪魔は彼が嗜む処の樽中に潜んで彼が肉の中
に交り入り而して彼に大なる愉快を感じしめて漸々に己が手に入れんとし其の術を施
せば漸々に樽を進抗す。後に樽中の愉快にほだされて悪魔は妓楼に彼を誘う。肉の奴
隷に近づけつつあり。彼は又やがて情魔の為に魅せられて妓楼の為に魂は奪われて
我が家の庭の妻子を顧るの暇なからしめらる。悪魔は幸福なる家の主人公をば己が
手に入れしも次に術を施すべきはかの世の貞婦と名に負う処の妻にありと、悪魔は頓
に妻の胸裡に潜みて夫に対する嫉妬の焰となりて燃え始めぬ。さしも昔の暖かなりし

庭も今はうちかわりて何とのう物麿しき閨の門に夫の帰るを待ちわびるに十二時の時は告げぬ、とても今夜は帰るべきはあらじ、もはや数うれば三日夜ア、と嫉恨の情魔は胸を焦しつ、よしや夫は帰らぬものと決心するも情魔が衝動する嫉みの炎夜は少しも眠らせじ。さしも貞女と呼ばれし妻女も心靈の空隙に乘じて情魔の為に遂に捕虜となりぬ。人はいかほど肉の幸福なるも心靈にして空隙あらんか必ず魔の為に其の空隙を伺われていつか心性をなやまされざるを得ず。

淑女がいつの試験も優等にて及第し、他もゆるし自分も信じて、やがては大臣の令夫人ともなりて世に待遇せらるべき理想をもて未来雲井にのぼる玉の輿を理想せしがさしも高かりし理想も、目にこそ見えぬ情魔はいつの間にやら浮名の立つか立たぬ程に袴の紐の短かさを感じ父の氏性もしらぬ子の母として貧しき裡屋に苦しき生活を営むに至る。

げに憎むべきは情魔のしわざかな。

肉我にくがの情誠じようまことに危あやうし。自己じこの根本こんぽん的てき真髓しんずいなる如来にょらいに帰依きえ信順しんじゆんし奉たてまつり如来大我にょらいたいがの中なかに安立あんりゆうして常つねに如来心光にょらいしんこうの増上縁ぞうじやうえんを仰あおぎ暖あたかなる慈悲じひの光ひかりの中なかに麗うるわしき家庭かていを作り如によ来の恩寵おんちように充みたされて肉情にくじやうの奴やつてとならざるようにすべし。

転道の増上縁

衆生しゆじやう意い志し薄弱はくじやくにして肉慾にくよく我慾がよくのために驅役くえきせられて惡道あくどうの業ごうを結むすび闇黒あんこくの生活せいかつに沈しずみたるものをも業ごうを転てんじて救済きうさいする増上ぞうじやうの力ちから之これれ転道増上縁てんどうぞうじやうえんなり。

如来にょらいはいかなる罪惡ざいあく深重しんじゆうにして墮獄だごくの業ごうを結むすべるものにても一たび如来にょらいの破邪はじやの光こう明みやうによりてその非ひを自覺じかくし改悔かいげの心窓しんそうを開ひらくときは忽たちまちに無始むしの業亡ごうほろびて光明こうみやう界裡かいりの聖きよき人ひとと成なることをう。是これ全く自己じこの力ちからにあらずして如来にょらいの増上ぞうじやうの力ちからによる。

人の惡業あくごう結むすばれて墮獄だごくすべき因縁いんねんは、元来がんらい人の天性てんせいは自分勝手じぶんかつて、幸福主義こうふくしゆぎ唯肉ただにくの快かい

楽のみを追ひ求めて慾の満足を目的とし動物と同じく自分の生存のためなるべく幸福なる生活を願望す。他の動物は唯本能に盲従して己が貪慾のためには他の動物を喰するも彼に苦痛あるを意識せず、唯己の本能に従いて之を喰うのみ。然るに人類に至りては本能にあらずして全く自我を分別し唯己に利ある限りを利用して我慾を逞うせんとす。人の悪なるものは意識的なるが故に悪に責任あり。

人の肉我は悪に傾き易きもの本来悪なるものであるから我意に任す時は益々悪が發達して大火の人の家屋を焼くに縦逸にして禁歇すべからざるが如くである。而してまた一方には世の中には悪の誘惑機関は世に充滿せり。

淫房酒肆遊廓に瓊玉の遊娼は彩黛を濃にして愚夫を獄に導かんと遊妓歌舞の袖を翫せば痴男魂奪われて餓鬼道に墮するを覚えず。

市肆に列れる人の感覺を奪う色味として悉く愚夫愚婦を誘惑して三惡道に誘う動機たらざるなし。さればとて是らの事物は本より事物にして美は美なり美そのものに

罪あるにあらず。此に對する願望が道德的に害ある事實によりて初めて罪惡となる。
惡の根本は主我即ち肉我なり。肉我は惡の固有なり。肉我は罪惡の淵源にして一切の惡はこれより衝動す。惡が功勞經て頑固にして良心の聲に應ぜざるに至れば已に惡は病的に墮落したるものなり。

云わば一定の快樂が屢々する時はいつしか習慣性となり習慣には必要を感じますます肉慾の感受性が抗進して之を刺激する材料を増さざれば快樂を感じず、必要の感情と強度の刺激とはついに肉慾の奴隸として慾性を造るに至る。肉慾即ち眼耳の色食のみにあらず、我慾即ち財慾名利虛榮等を貪り、排他的の我利に於ても尚一層憤怒、慳貪、嫉妬、傲慢の如き益々抗進して已に病的に陷る時には他人に苦痛を被らしめんが為には己の苦痛をさえ感ぜざるに至る。憤怒の火は他人を焚かんために先づ己を焼く。昔殿中の女房共に相互に嫉妬の炎胸に充てるを圖に表したるに咀女怨頭に二挺の蠟燭を燃し左手に嫉しき人の人形を携え右に数本の釘と鎚とを持ちて怖しき顔色

はいかにも嫉妬しつとの悪弊症あくへいしやうを表あらわせり。

病的びやうてきの罪惡ざいあくは憤怒嫉妬ふんどしつとにも他見よそみにはいかに苦痛くつうならんと感ぜらるるも本人ほんにんは為ために心中ちゆうかえ還かえつて趣味しゆみを感じかんずるに至いたると。憤怒ふんぬの病的者びやうてきしやには憤いかりを發はつして或あるいは器具きぐを破壊はかいし人を打擲ちやうちやくする時に初はじめて愉快ゆかいを感じかんずと。いかに他人たにんの迷惑めいわくぞや。また夫婦間ふうふかんの鬭争とうそうに打擲ちやくらんぼう号泣ごうきし之これまた屢々しばしばして抗進かうしんして病的びやうてきに墮だすれば彼らかれの胸中きやうちゆうには興味きやうみを感じかんずるに至いたる。すべて残忍ざんにんの淫好いんかうと惡意害意あくいがい相合あひがつすれば人の心情しんじやうは己おのれが利害りがいを忘わすれて他人たにんの苦痛くつうを喜び他人たにんの喜よろこびに對たいしては非常ひじやうに不快ふかいを感じかんずるが如ごときは皆病的みなびやうてきと云べう可べし。惡弊症あくへいしやうは遺傳いでん的素質てきそしつとなり其子孫そのしそんには犯罪人はんざいにんを出いだすに至いたる。惡心あくしんの抗進かうしんせる變態へんたいは種々しゆじゆの方面ほうめんに偏へんす。人の肉にくは惡あくの性せいなれども病的變態びやうてきへんたいは根本惡こんぽんあくよりは一層そうはなはだ甚しし。種々しゆじゆに變態へんたいせる惡あくの偏執性へんしゆせいを区別くべつせば次の如ごとし。

地獄ぢごくとは常恒大闇黑じやうどうだいあんくの中なかに於おいて自然しぜんに其身そのみは倒さかに懸かりたる生せいをうけ消えざる業火ごうかの

極熱の業火に焼かれ劇苦に際なく阿鼻焦熱の苦は一切万有中の苦悩の最たるものなり。いかなる業力によりて斯る苦悩を感じずとなれば一類の輩あり、最も害を世に与うる事多き方面に向てその性格に習慣性をなしたるもの、五逆十惡の上品邪見にして惡中の惡たるもの精神闇黒に良心已に麻痺し嚙冥牴突の故に闇黒邪見にして五逆を造る。故に倒に懸る。業の習慣性が已に惡弊症に陥り天理に逆い人道に戻り殘忍酷薄極惡の所作実に聞く人をして戰慄せしむ。例せば夏の桀、殷の紂が己が肉我の快樂を貪るために民に塗炭の苦を被らしめ又世に己が快樂のために数多の人の幸福を犠牲にするが如き、かかる逆惡殘忍なる惡の偏執性は地獄的業識とす。

餓鬼道に種々あり。中に就て今有財と無財との二種を挙げれば、有財餓鬼とは眼前に食物を見るも其喉針の孔ばかりにして食すること能わず常に飢餓のために劇苦を受く。自分勝手なる排他忘他により周囲の人々に害を与うる惡性、貪欲、嫉妬、邪見、惡意、之等の慳貪邪見のために他の害を顧みず貪戾にして厭くことなく貪恪の惡弊症

なり。仏在世に慳貪なる長者あり。財宝を積累すること巨万、一錢の財を費す時には生皮を削らるる如くに感ずと。無財とは斯餓鬼道には一切の飲食として見聞することさえ能わずして常に飢渴の苦を受く、世に人類あり放蕩縱逸にして活業を営まず、飲食に耽り、色に荒み、奢淫放逸、肉欲の奴隸たり。すべて五慾なるものは一定の快樂屢々すれば習慣性となり必需となり遂に病的に墮す。色食の慾または懶墮、放蕩等の唯肉の快樂のみを貪る偏執性は肉慾の餓鬼と云うべし。肉慾姪好、世に飲酒の餓鬼喫煙の餓鬼あり。或は名譽を貪り權利を貪る餓鬼あり。或は嫉妬、恨怨、詭曲等の病的偏執性は悉く餓鬼道と云うべし。

次に畜生道の業識とは人生の營養生活の動物生活以上の目的あるを知らず、道德倫理もなく、人と交りて仁恕もなく、義務の感もなく、全て人倫の高等なる機能は發展せず、敢て惡の方面は發達せざるも又必しも善の方面が發展せず、人の精神の高等なる理性をもて全ての感情及び動物慾を抑制すること能わざるものは人格全からざる

ものなり。

故にたとえ形骸は人類に進み来りしも其内の生活の精神なるものは未だ動物の区域を脱すること能わず。故に此れ心理的に區別せば畜生道に摂すべきなり。畜類は横行す。正しき人道を正行すること能わざるもの、即ち横的情操横的行爲、形は人類に似たれども其情操と行爲とは動物に異ならず。世の所謂人面獸心たるもの暴行虎狼の如く、淫沃鳥に類するあり。人類にまで進み来りし甲斐もなく自の性格を畜生に安立するとは如何に浅間しきにあらずや。

人の罪業已に成じて獄鬼等に異熟したるを身は人体なるも已に業識は地獄または餓鬼道に成じたるなり。斯く悪業成したる此業識は即ち我執なり。

自ら転じて解脱すること能わざるも、如来の慈悲の光明の増上縁によれば、いかに罪惡深くとも疑うべからず、必ず如来の光明は斯かる三塗勤苦の処に住するも救済せられんこと必せり。

罪根深き人が既往の罪を真実に悔い改め真実に如来の慈光は接したるを觀經に下
品往生人を説いて、極重惡人罪として造らざるなく、日々惡として犯さざるなし。惡
業已に成じて應に地獄に墮すべき命終に臨んで獄火眼前にあるも善知識の教により如
來の光明神力を仰いで至心に己を投じて如来に歸する時改悔一念に無始の重罪頓に
消滅して地獄の猛火化して清涼の風と為りて諸の天華を吹く、華上化仏ありて現前
し、一念の頃に即便ち往生を得。現在獄業成じたる極惡人の胸中には獄火炎々たり。
知識の教によりて一念の懺悔に我を捨て如来の光明界に化生する時は、心機一転し
て念念胸臆に熾然たる邪見の火は化して常に如来の清淨光裡に清涼の風そよぎて
麗しき精神生活の人と成るをうべし。

論註に、千年の闇室も窓を開き忽に闇去りて明來る如く、人は如何に罪惡の病的
に沈むとも、精神の闇底に心靈の伏せるあり。真理の光明は本より宇宙の内面に存
在して常然たり。知識の教によりて如来の天心光を被るとき、無明長夜の眠覺めて靈

性覺醒するとき、忽ち己を返照すれば自己は是如来の心光界にあり。

如来の増上の光明にはいかなる罪障の深きをか憂えん。慳貪嫉妬の餓鬼業熟せる

輩らも若し慈悲の増上縁によりて忽ちに己の非を覺らば、如来の光明は真理中道を

照す故に、たとえ極重悪人も如来の光明によりて変ずる時は地獄も變じて淨土と成

り、我慾貪戾、邪性は變じて菩提四弘の願と化し、貪愛は化して衆生に對する仁愛と

成る。一切衆生を父母の如く子の如く恋人の如く、真心に愛して彼をして自己と同じ

く如来の幸福を共にせんと欲するに至る。

肉慾病的は變じて、如来の妙なる応化の相好を愛樂し憧憬し、靈の妙味を貪り、法

喜禪悦の妙味を嗜み、如来の泉源より湧出する醍醐の酒に三昧の園に心靈の快樂を貪

りて飽くことなきに至る。

仏光の増上縁によりて畜生的の性は靈化して仏光の前に己が愚痴なることを知る。

全く心靈如来の真境に逍遙する人は人の前には愚なり。孔子が郷党に在りて言こと能

はざるものに似たり。又ソクラテスは我は自己の無智を知ると。故に人の前に點智も
 のほど真理の光明に遠るものあらじ。導師も失意聾盲痴人の如くならば此こと得
 易しと。人の前には愚なるにいたり此に至りて如來の眞光を如実にえらるべし。

修羅道の性とは憍慢を性とし鬪争を力とす。我より衝動する傲慢は天を畏れず世を
 なみしただ威勢を張る。經に、慘賊鬪乱誠実なく尊貴自大にして己れ道ありと謂うて
 邪に威勢を行じ人を侵易して自ら挙高して人の敬難を欲す、天道を畏れず賢人を遠
 ざく、実に降伏すべきこと難しと。斯る性格も仏光の増上力に靈化せらるるときは尊
 貴自大の傲慢は獨立自尊の自尊心となる、斯の自尊心は神聖なる如來の光によりてな
 り。自己は是仏子即法王の子なり。如來の聖靈宇宙何物か之に代うるものぞ。聖靈自
 尊の意志なきものは名利の奴隸となり、名譽の前にぬかづく如きは自尊心を自ら侵害
 するものに非ずや。

独尊の眞理は肉我の能うべきにあらず。いかにとなれば肉体は自然に規定せられ、

独尊独立不羈自尊は如来の増上力によりて得たる心靈我にして初めて不羈独立自尊を得べし。肉我は自然に約束せられ自然は我身心を悉く機制的に約束して少しも我に独立の自由を与えず。まして況や、世の法律のために縲紲にほだされるに於ておや。肉の名譽權威地位財産は決して心靈に自尊心を与うるものにあらず。尊きは全く自己にあり。為に束縛せらるるものは自尊にあらず。全く心靈に自尊ありて自ら人爵の来るは敢て辞するに及ばず。然れども天爵も忘れて人爵のためにするは自尊にあらず。

人は天資美質は決して自ら誇る可きにあらず。父母祖先汝を生み、天汝に賦す。若し仏教に云わば汝が忍辱の業因汝を莊嚴す。又エピクテトス曰わずや。我は良き馬を持てりと誇れど良馬は馬の良きにて人の誇るべきに非ずと。此と同じく財産地位に於てもそれは財貨の良にして全く自己の良きにあらず。

我にある闘争は若しは有形に若しは無形に修羅場を現出す。競争又必要なり。物は

競争きょうそうによりて發達はつたつす。然しかれども我的がてきより衝動しょうどうする鬭争とうそうは即すなわち人界にんがいにして修羅場しゅらじょうと化かす。
内心ないしんの鬭争とうそうに於おいても唯我ただが慢勝まんしょうた他の惡方面あくほうめんを抗進かうしんす。若もし如來によういの心光しんこうの増上緣ぞうじょうえんによれば
此この鬭争とうそうの類るいは惡魔あくまなれば一切さいの魔賊まぞくを征伐せいばつせん為ため健闘けんとうをなす。惡魔あくまは外界がいがいのみに
あるにあらず。却かえつて自己じこの心内しんないに伏在ふくざいせり。此この煩惱ぼんのう魔まと健闘けんとうするに當あたりては如來によういの
増上力ぞうじょうりきによりて勝利しょうりを得うべし。

斯かく三惡あく四趣しゆの業道ごうどうを転てんずるは如來によういの増上緣ぞうじょうえんなり。

意志靈化

如來の不斷光は衆生の意志を靈化す。意志は靈化されて菩提心となり、如來の終局目的に協力し行動に聖意を実現す。

意志の信仰は実行にあり。即ち回向發願心なり。知力に聖靈を知見し、心情に心靈融合の花開き、意志実行は果を結ぶものなり。意志の願望は上如來に冥合し下衆生と共に安寧を求め之を實現的に行爲するにあり。

消極的には世俗情操、世界動機、我執の如き天然的我意、即ち肉欲我欲に規定せられたる意志は無上菩提に適せざるものとして之を排除し、積極的には我意を聖意に伏し個人目的を超えて如來の終局目的に参与するにあり。

機制我は因果に規定せられ、自然に支配せられ、道德自由得ざるのみならず、我は

罪惡の根本肉慾我慾此より生じ、我の幸福の外に欲望なく、個人の外に目的なし。かかる我意に道德の根柢を求むべからず。

機制我を超えて其の最深の根柢たる真我を発見し真我に我意を伏し一切の感情意志等を支配せしむ。

真我は如来の一大真我の泉源と連絡す。是道程之を無上道心と云う。この道德的最高の衝動即ち道德的情操より意志は心靈に転じ実行の信仰と成る。人が如来の泉源より自己の心靈に湧き出づる聖靈によりて道德の修養に力行し、我意に対し克己し、聖意実現たる菩提心を鞏固にして意志を靈化す。

靈化は如来の恩寵なり。最深の真我より信念に湧く靈によりて道德練修する時は我意に属する煩惱を訓練し遂に転化して菩提と靈化す。

知情意を致一せし靈的精神の心靈は如来恩寵の啓示により、神聖としては自律道德を命じ、正義としては我意を服し聖意実現の為に天職を果さんことを欲す。

無限の恩寵が人の心情には融合安立の靈福を与え意志を靈化して如来の目的に協力して聖意実現に行動せしむ。如来の恩寵たる啓示に解脱し靈化したる心靈即ち菩提心なり。

超世俗靈化の心靈は志節高尚に天人欽仰し八部恭敬す。仰げ慧遠の志氣高節、空祖の徳容温顔、世の榮辱の為に一念も動かされず、導師の勸化康公の清節高く人天に出で而も普く人間を度す。

正 道

信心已に開展して如来の中の光明生活、即ち如来の神的衝動より実行々動するを聖道と為す。即ち如来の司導する行為なり。

また仏知見開示して仏の正道に行爲する故に正道とも云う。聖道は一時に非ずして

常恒不斷に進歩すべきの過程なるが故に、絶対的如来に依属せる精神にも自己の習気は、肉のあらん限りは、忽にする時は退歩の憂なきこと能わず。弥陀の恩寵の中に在てもまた自己の罪惡を生ず、念々に恩寵を感じて念々に罪惡を転ずべし。罪惡の性は菩提なる故に、如来の恩寵によれば忽ち變転して如来の靈能と顯わる。如来の無限の光明の中に常恒不斷に念々に一步一步新らしき地歩を収めざるべからず。歩々不斷の靈光によりて新しき地を占め、念々に起り来る煩惱をして悉く如来の増上縁力の下に靈化せざるべからず。是の如きの信仰を鞏固にして金剛の意志をなす。

此聖道即ち道德自修の目的となす処は、改善にあり。改善とは自己を剋して如来の聖意に服せしむるにあり。この改善は修練習慣によりて全く性格を變更するにあり。消極的には利己の惡を脱却し積極には如来の理性即ち至高善を得んと練修す。八正道即ち正見乃至正定は小乗のとは名目に於ては同じきも其内容に於ては全く異なるなり。八正悉く如来の中の神的行為にして如来の光明聖意を自己に実現し、

如來の目的に協力して聖道に進趣活動する行動なり。

正見。仏知見開示してこの正知見が司導となりて行動す。已に正知見開示する時は從前の盲目的衝動によらず、自己は如來の中の個人たるを意識し、如來の終局目的に協力し、神聖正義の光が自己主觀の光となりて此光の中に実行すべき命令となり、即ち絶對理性の弥陀の内容を自己の主目的とし道德的自律を完成して客觀的目的を主觀的規律となす。正見は云わば通じては解性にして真非真を認識する職分にして又善惡の行為を決定すべき意志なり。正見は意思を決定して正善に指導す。正知見なき情操と意思とは正善に決定すること能わす。

正思。如來に依る思惟を正思とし、爾らざるものを不正また邪思惟となす。人は思惟によりて善惡邪正の決定すべき目的を思惟し籌慮す。已に恩寵獲得したる人も猶天然の性存するを以て放恣するときは墮落の憂なき能わす。已に獲得したる恩寵即ち聖意を実現せんと思惟し、法藏比丘の如く、思惟し撰択し習學して常に自己の魚

悪あくを捨てすて如来にょらいの真善しんぜんを選せん取しゆし、常つねに新あらたたにしてまた新あらたなれ。

ひと 一ひとたび恩寵おんちよう獲得くたくとくしてよりは正思惟しやうしゆいによりて正邪善惡せいやぜんあくを見みること明かなるが故ゆゑに自じ己こをすて如来にょらいの正善せいぜんを選せん取しゆするに甚はなはだ便利べんりなり。

理性的意思りせいてきいしは理想りそうによりて規定きていせられたる人ひとの意思いしの最高さいこうの發展形式はつてんけいしきなり。理性的意思りせいてきいしは天然生理てんねんせいりに規定きていせらるる下等かとうの意思衝動欲望いししやうどうよくぼうに對たいして正義せいぎの理性りせいによつて批判ひはん撰せん択たくの務つとめに任にんず。理性的意思りせいてきいし即すなわち良心りやうしんが天然意思てんねんいしを正思惟しやうしゆいによりて修練しゅうれんし訓練くんれんす。意思いしの自由じゆうは仏性ぶつしやうにして、この理性りせいの自由じゆう即すなわち正思惟しやうしゆいによりて如来にょらいの目的もくてきに協力きやうりきせざるべからず。人間にんげんの自由じゆうは精靈せいれいをして動物どうぶつ的欲情てきよくじやうを支配しはいせしむるにあり。人間にんげんの意思いし自由じゆうは感覺かんかく的欲望てきよくぼう及び性癖せいへきを理性りせいと良心りやうしんによりて統攝とうせつし目的もくてき及び規則きそくに従したがつて其生活そのせいかつを規定きていする能力のうりよくなり。

正業しやうごう。積極せつきよくには、真実しんじつを守り權利けんりを保ち、家庭社会かていしゃかいの秩序ちつじよを紊みださざる如ごとき、消極しやうきよくには不殺ふせつ、不盜ふとう、不邪淫等ふじやいんとうの如ごとき、如来恩寵にょらいおんちように衝動しょうどうさるる作業活動さごうかつどうなり。自己じこの惡素質あくそしつ

と從來の悪習慣とは聖意に適せざるものとして矯正し、如來の道德的性を養い聖意の実現に意を注ぎ、靈化の恩寵をうけて道德実行するにあり。情操は一変して退転せざるも之を実行々動に実現するに非ざれば未だ正業とするに足らず。良心よく主觀的に道德秩序を発見し自律的に一切の身業悉く如來の聖意實現的に行爲す。恩寵を獲得して意思の靈化即ち菩提心頭動せざるべからず。其動作にして客觀的には行爲者及び其周囲の人に安寧を増進する円満なる生活形成を成就する傾向を有し之と同時に主觀的に義務を尽せりとの意識を有する時は之を道德的に善と称す。善人は必ず其義務を怠らず、各自の職分を全うす。自ら恩寵中なる自己の義務を尽せりとする行爲は正業にして、自ら斯々の作爲は聖意に背くものとする行爲は邪業なり。法華に仏法を体得する人は一切の治生産業も悉く実相と相応すと。

全く恩寵に依る一切の生業も悉く如來の命令にして恩寵自己にあつて活動する職務は是正業なり。また善の動作なりとす。

正精進。人は已に全心全幅を如來に投じて恩寵を離れたる自己の情操なきを感じ、如來に安立して性格も一転して靈化せるも、天然の自己あらん限りは煩惱及び誘惑物との健闘を廃止すべきに非ず。

人如來の中の精神生活をなし、即ち此土の諸の衆生と共に平等の同じ恩寵に靈化して、精神的に此土に安寧界を建設し、神的思想を実現せんが為には、直前往進して個人の利害生命をも犠牲に供せざる可からず。既に靈化せし意志は自身の利害生命を犠牲に供することに躊躇せざるに至らん。

正命。正善なる生活を正命とす。

人の理性に適合する生活は人間の絶対目的にして理性に適合する生活を営むは即ち其安寧を求むる所以なり。充分の勢力と健康を保ち、正善なる身体及び精神の諸能力を円満に發展せしめ、一切の理性的倫理的生活活動を増進し、自己と自己に近き人々との關係を益々親密ならしめ、如來の恩寵によりて精神生活の内容を深くして神的安

寧を得て円満に生活す。至善は如來の恩寵にして、如來の聖寵に充ちたる内容即ち性格と行為にて到達す。正義の觀念によりて尽すべき義務を全うし自己を捨てて聖種性格とし正しき意志決定を涵養す。

慈悲歡喜正義安忍剛毅貞操謙遜真實等は光明生活の正当なる生命なり。

解脱と救済と摂化

仏教のうちに解脱主義と救済主義と光明摂化主義の三主義あり。

初め解脱主義は大小乗に亘りて衆生には消極的に脱却すべき惑業苦の惡素質あり。

積極的には開發すべき靈的性能あり、惡質は例えば鉉垢の如く鉉垢を除き去りて珠玉

の光輝を發するが如くに、衆生の惑業苦を除き去る為に戒定慧の三學を修して靈的自

覺の光明を開發し覺了と実行の究極を得道す。之れ衆生本具の靈性を開發して煩惱

の惡質を解脱するの主義なり。大小の聖道門此れに属す。

次に、救済主義——衆生は全く無明罪惡の凡夫、自ら解脱の因なく、唯絶對的大救

主の救を仰ぐ外に道なし、唯衆生は無知無力にして自己の力の及ぶ處にあらず絶對的

に歸命信賴する時は必ず永遠の救を得るものと信じて救済せられたる上には如何に為

し給うも自己の意を容るべきにあらず。何となれば本より地獄一定の悪人が如来の本願に助けらるるものなれば、唯地獄の苦を免がれ如来の助けを蒙むることなれば唯如来に一任すべきのみ、自余は只あなたの聖図に順う外なしと確信す。之を救済主義とす。

光明摂化主義

斯の主義は前の兩者を合したる如く、一切衆生は本大みおやより受たる靈性と人間より受たる煩惱との兩性を具して居る、故に靈性は具有すれども産みたての卵のようなものにて孵化せざれば活用せぬ。故に只人の子としては無明と罪惡と汚れと苦悩とである。若し未だ靈性を開き煩惱を靈化するにあらざれば永遠に闇黒生死の苦を脱すること能ず。此の生死の苦を脱して永遠の常樂と円満なる人格とに為らんには、みおやの光明に摂化せらるるの外に道なし。衆生は大みおやを信樂して一心に念仏する時はみおやの光明に摂化せられて靈性の開くを信心開發すと云う。罪惡と及び苦

悩は解脱し靈化す。經に「三垢消滅身意柔軟」と明し給う、然して光明獲得する時は體現的に生活し、而して後命終ればみおやの許に至りて永恒の靈福と共に靈的に活動することを期す。

念

仏

念仏と云う事を文字に寄せて説明すると、念と云う字は人、二、心。即ち人が二り一つに為つて居る相である。是は付会の様なれども、事實に契つて居る。念と云う事は自己の外に何物か又何者にか心が懸つて居る所から起る心の作用である。母が可愛子を憶う。母の心には常に子を懷うて居る。其母の胸臆から其子を取り除いて仕舞うことは不可能。故に其母の心は子と二人が一つに成つて居る。夫婦間に夫から婦を妻と云い、婦から夫を我つまさま等と云っている。其所以は常恒に其配偶者を心のつま

に係かけて離はなれぬ故ゆゑである。又妻またつまから夫おつとを我わが脊せ子こと云いうのは常つねに背せ負おうて離はなれぬと云いう義ぎである。未いまだ結けつ婚こんせぬ昔もは形かたちの上うへ計はかりでなく心こころの中なかにも全またく一ひとり人であつた。既に結すで婚けつこんした以後いごは心こころのつまに常つねに係かけて居いるものがある。其それが即すなわち念ねんである。其配偶そのはいぐう者しやが其胸臆そのむね中なかに居いる訳わけである。

其心そのこころに宿やどれる最もも力ちからの強つよきものに心こころは動うごく事ことが大おほき。其度そのどに於おいても例れいせば子こを愛あいすること其配偶そのはいぐう者しやよりも強つよきあり。それは子こと二人ふたりが一ひとつとなつて居いる心こころである。

又世またよには財物ざいぶつを愛あいすることすべてに超こえて愛あいするものあり。巨万きよまんの財ざいを有ゆうする身みが一ちよう朝株券暴落あさくばげんぼうらくの結果けつか其財産そのざいさんを失うしなふ時ときは彼かれは妻さい子しをも我身わがみも一切さいを忘わすれて自殺じさつする。彼かれは其胸臆そのこころの慾望よくを充みたす財産ざいさんを生命せいめいと為して居おつた為ために、財産ざいさんと情死じようしせざるを得えぬことになつたのである。

又火鉢またひばちの木炭もくたんは炭箱すみばこの中なかに一ひとり人ひとで真黒まっくろで居いたが、何時いつの間まにか火鉢ひばちの中なかに入はいつて火ひと一いっ処しょに為なつて紅あかい色いろの氣焰きえんを吐はいて如何いかにも愉快ゆかいそうになつて居いる。炭すみでも火ひと結けつ婚こんと一いっ処しょに為なつて紅あかい色いろの氣焰きえんを吐はいて如何いかにも愉快ゆかいそうになつて居いる。炭すみでも火ひと結けつ婚こん

してから二人一つとなると、かく迄に陽氣に為るものかと怪まるる。恰も我等の心が
 従来は真闇で炭団であつた其頃には何の活氣もなく黒き炭であつたが、念仏してから
 火が我が炭団に加わると靈的活氣が発して靈に活発なる心となつてくる、それが念仏
 心である。仏と二人がひと為つた心である。一室の中にも夜分真闇でありしが夜が
 明け太陽が昇つて一室の中に日光が入り来ると夜前の真闇な空氣と日光と一に為て室
 内が明るく暖かに如何にも陽氣となる。空氣と日光と室内で一処になつて一日陽氣に
 遊んで、暮れ方には光線は何時の間にか歸り去る。而すると家僕がもう光さんが歸り
 なされて内の空氣一りになつたからと云つて窓を閉じて仕舞う。室内空氣は独りで森
 閑と物寂しく為る。明日まで室内の空氣は睡つて居る。翌朝は又日光が爽に赫々と
 御出なされると又空氣と日光とは忽ちに一になる。我等が心の空氣も亦信心の暁にな
 らぬ間は闇室であつたが、念仏の心を以て信心の窓を開くと如來の日光が我等が心の
 空氣に加る時に仏心と衆生心と二人が一つ心と為つた、即ち仏念の心が信心である。

からだは自然に或時期に至ると配偶者を熱望する生理的衝動を有て居る。独では物足らぬ感を起す。そは凡百の動物に通じての性である。故に其配偶者を迎えて家庭を造る。頭腦の中枢に座する所の靈性も亦靈的配偶者を迎うべき性を有て居る。恰も肉性が未だ幼稚の間に配偶者の必要を感じざると同じく靈性も未だ幼稚な程は靈的配偶者の必要を感じずるには至らぬ。動物性は何人も成長すれば独身生活では満足出来ぬであらう。靈性が独身生活には満足出来ぬと云うに到るのは最も高等に進んだ人である。何かより己上の目的の為に独身生活するは偉人である。カントやスペンサーやナイチンゲールの如くなるは彼等は各々普通以上の目的を遂行せんが為に取った道である。然るに若し鰥寡の如きは世上からも皆不幸の人として同情せらるる。然るに肉体は立派に家庭を造って居ても靈性に於て天上の美人、神と結婚をして靈性が最美最靈最妙の家庭を造る事の出来ぬ族は多い。否皆々然りである。

宗教は各自の精神の奥に潜む靈性を發達せしめて而して最靈なる如來の靈性と結婚

せしめて現在げんざいより永遠えいえんに至るまで離婚りこんのない結婚けつこんを営み、而して最も靈れいなる妙たえなる美びなる心靈しんれいの家庭かていを造るのである。苟いやくも高等こうとうなる宗教しゅうきやうしん心ある方かたにて靈的れいてきどくしん独身どくしんの方かたはな
い。教祖きやうそしやくそん釈尊みを見よ。光顔こうげん巍々ぎぎとして威神いじん極きくりなきを表示あらわす釈尊しやくそんの靈的内容れいてきないようは無む限げんの
光ひかりと靈れいとに充満じゅうまんし玉たまえる故ゆえなり。即ち淨満じやうまん月皎潔げつこうけつとして麗うるわしきは西にしに入る日ひの反はん
映えいである。釈尊しやくそんの靈れいは無量光むりやうこう如來にょらいの反射はんしである。釈尊しやくそんは肉にくに於てのヤソタラとの配偶はいぐう
は断だんじたるも靈性れいせいに於て無量光むりやうこうとの結合けつごうは永遠えいえんにまで合一ごうして變へんぜず。

竜樹りゅうじゆ聖者せいじやも亦然またしかり。信心しんじん花開はなひらきて仏ほとけを見ると尊者そんじやが云いひしは、自己じこ靈性れいせいの花開はなひらきて
如來にょらいの大慈悲だいじひの靈氣れいきに催もよおされて我等われがが信心しんじんの花はなが開ひらく時に最も美うつくなる彼かれと共に仏ほとけを見
るとは仏ほとけと結婚けつこんの祝いわいなる華燭かしやくの礼れいを行おこなひしに同じである。其後そのご彼竜樹りゅうじゆ尊者そんじやは如來にょらいと配
偶ぐうを永とこしえに離はなることなし。聖者せいじや善導ぜんどうは衆生しゆじやう佛ほとけを憶念おくねんすれば佛ほとけも亦衆生またしゆじやうを憶念おくねん
と。聖源信せいげんしんも聖源空せいげんくうも彼の聖者等せいじやらうは悉ことごとく如來にょらいと共に靈的生活れいてきせいかつせざるはなし。是念これねんの
心こころである。如來にょらいと二人ふたりが一ひととなりし心こころである。之これを念佛ねんぶつと云いう。

釈尊の垂範

釈尊しやくそんの宗教しゅうきやう的信念しんねんの内容ないようの消息しやうそくを洩もし給たまえる無量寿經むりやうじゆきやうの序説じよせつに於おいて正まさしく我等衆生われらしゆじやうの信仰心しんこうしんの積極方面せつきよくほうめんは斯かくあれかしとて模範もはんを示しめし給たまえり。釈尊しやくそんが弥陀三昧みだざんまいに入い給たまうた爾時そのときに釈尊しやくそんの精神世界せいしんせかいは我等われらが肉眼にくがんに見みる天地てんちとは全まつたく異ことにして絶對無限ぜつたいむげんの靈界れいかいの清淨真天しやうくしんてんに無量光むりやうかうに如來かくかくは赫々たいようたる太陽たいようとして無量むりやうの相好光さうごうかう明み普そうごうかうみようあまねく法界ほうかいを照てらし給たまう、其弥陀そのみだの光明かうみようが反映はんえいせる釈尊しやくそんの相好さうごうは譬たとえば太陽たいようが満月まんげつに反映はんえいする如ごとくなり。經きやうに爾時そのときに世尊せそん諸根悦しよこんえつちよ予ししきしやうじようし姿色清淨ししきしやうじようにして光顔かうげん巍巍ぎぎたること明淨みやうじようなる鏡かがみの影かげが表裏ひやうりに暢とおるが如ごとしと。黄金かうこんの色身しきしん万徳円満まんの相麗さううるわしく御血ごけつ色しよくは殊ことに清きよらかに玲瓏玉れいろうたまの如ごとく光顔げんは巍巍ぎぎとして威神極いじんきくりなきは是これさながら弥陀みだの光明かうみように反映はんえいせる釈尊しやくそんの御みすがたなり。斯かくの如ごとく模範もはんを示しめし給たまえる釈尊しやくそんの教おしえに隨したがうて弥陀みだの光明かうみように依よつて復活ふつかつする時ときは

いかん。我等の無明と染汚と苦惱と罪惡とは是弥陀の光明によりて脱却せらるべき
 消極的方面にて清浄と歓喜と智慧と不斷とに靈化し給うは積極的方面なり。弥陀の光
 明は實に是人の精神をして現在を通じて永遠に活す靈力なり。現在より精神的に眞の
 幸福と光榮とを与え而してすべての活動に無限の力を与え給う靈徳なり。凡そ有ゆる
 宗教中に無量寿經中に現われたる釈尊の御身に示されたる宗教心の模範ほど積極的
 活々したるものは他に無いと思う。諸君よ、あなたの御頭の中台の玉座に在ます靈性
 は本大ミオヤの王子に在ませども未だ幼にして全身心を征服し統禦する權威を得給わ
 ざるなり。されば宇宙の大ミオヤの光明を被りて幼君をして即位せしめて全身心
 を統率してミオヤの光明の下に自己の使命を果すべく無限の力を与えらるるよう
 常に聖名を称えて祈り給え。